飯田市

HABAGONGENDO

羽場権現堂遺跡

中央新幹線建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
―飯田市内その１―

２０２０．１２

東海旅客鉄道株式会社
長野県埋蔵文化財センター

羽場権現堂遺跡遠景　南から

竪穴建物跡 SB01　埋甕炉断面

例　言

1　本書は、中央新幹線建設工事に伴う、羽場権現堂遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2　羽場権現堂遺跡は、長野県飯田市大休 1575-1 ほかに所在する。

3　発掘調査は、一般財団法人長野県文化振興事業団長野県埋蔵文化財センターが実施した。

4　調査期間は、発掘作業が 2019 年 4 月 12 日～7 月 31 日、整理等作業が 2020 年 4 月 1 日～12 月 31 日である。

5　本報告書の編集は、藤原直人・平林　彰が行った。執筆分担は以下のとおりである。
第１章　岡村秀雄、第２章・第３章　鈴木時夫、上記以外　藤原直人
校閲は、調査部長　川崎　保、飯田支所長　岡村秀雄が実施した。

6　発掘調査の受委託契約等については第１章第１節を参照願いたい。

7　本書で報告した羽場権現堂遺跡の諸記録・出土品は飯田市に移管される。

8　発掘調査および報告書作成に当たり、以下の諸機関・諸氏に御指導・御協力を賜った。御芳名を記して感謝の意を表します（五十音順、敬称略）。

飯田市教育委員会　飯田市上郷考古博物館　長野県文化財保護審議会史跡・考古資料部会
長野県立歴史館　小林正春

9　発掘調査の担当者は第１章第１節に記載した。

10　発掘調査に当たって、以下の機関に業務委託した。
測　　量：株式会社　小林コンサルタント
遺物実測：株式会社　アルカ
遺物撮影：信毎書籍印刷株式会社

11　遺跡の概要は、長野県埋蔵文化財センター刊行の『年報』36 で紹介しているが、本書の記述をもって本報告とする。

12　本書に添付したＤＶＤには、以下の内容を収録した。
本文ＰＤＦファイル、土坑（ＳＫ）一覧表、土器観察表、石器観察表

凡　　例

1　本書で扱っている国土座標は、国土地理院の定める平面直角座標系第Ⅷ系の原点を基準点としている。座標値は世界測地系による。

2　本書で掲載した地図は、国土地理院発行の１：25,000 地形図「飯田」、１：2,500 飯田市都市計画基本図（承認番号：１飯地計第 123 号）である。

3　掲載した実測図の縮尺は、原則として以下のとおりである。

遺構実測図　竪穴建物跡　１：60、１：30　　土坑　１：60
ただし、調査区全体図・遺構配置図・挿図などは任意である。
遺物実測図　土　器　１：３、１：４
石　器　１：３、２：３、１：６
遺 物 写 真　遺物実測図とおおよそ共通である。

4　遺構番号は、遺構種類ごとに付番してある。発掘調査の過程で遺構と認定しなかったため、欠番としたものがある。

5　文中、表における（　　）は次のとおりである。遺構の形状は推定値、規模は残存値を示す。遺物の法量は残存値である。

6　土層および土器の色調は農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』（2014 年度版）を基準とした。

7　実測図中のスクリーントーン等は以下のように用いた。

（１）遺構図

地山

硬化面

（２）遺物図

石器摩耗痕・磨面

石器使用痕

目　次

口絵
例言
凡例
目次
図版目次
表目次
写真図版目次
第１章　発掘調査の経過
　第１節　調査に至る経緯 …… 1
　　1　事業計画の概要 …… 1
　　2　埋蔵文化財の状況と保護措置の調整 …… 1
　　3　行政手続の経過 …… 1
　　4　発掘作業と整理等作業の体制 …… 2
　第２節　発掘調査の経過 …… 3
　　1　発掘作業 …… 3
　　2　整理等作業 …… 3
　　3　普及公開活動 …… 4
　　4　作業日誌抄 …… 4
第２章　遺跡の位置と環境
　第１節　地理的環境 …… 5
　第２節　歴史的環境 …… 5
第３章　調査の方法
　第１節　発掘作業 …… 9
　　1　遺跡名称と遺跡記号 …… 9
　　2　遺構名称と遺構記号 …… 9
　　3　調査区とグリッドの設定 …… 9
　　4　表土の掘削と遺構の検出 …… 9
　　5　遺構の発掘と記録類の作成 …… 9
　第２節　整理等作業
　　1　遺物と記録類の整理 …… 10
　　2　報告書作成と資料収納 …… 10
第４章　基本層序と遺構・遺物
　第１節　基本層序 …… 12
　第２節　遺構 …… 13
　　1　竪穴建物跡 …… 13

2　土坑 …… 13
第3節　遺物 …… 17
1　土器・土製品 …… 17
2　石器 …… 21
第5章　総括 …… 25
引用・参考文献
写真図版
報告書抄録
奥付

図版目次

第1図　遺跡の位置 …… 2
第2図　羽場権現堂遺跡周辺遺跡分布図 …… 6
第3図　調査区とグリッドの呼称 …… 11
第4図　基本土層図 …… 12
第5図　1区遺構配置図 …… 26
第6図　2区遺構配置図 …… 27
第7図　SB01遺構図 …… 28
第8図　SB02遺構図 …… 29
第9図　SK遺構図（1） …… 30
第10図　SK遺構図（2） …… 31
第11図　出土土器（1） …… 32
第12図　出土土器（2） …… 33
第13図　出土土器（3） …… 34
第14図　出土土器（4） …… 35
第15図　出土土器（5） …… 36
第16図　出土土器（6） …… 37
第17図　出土石器（1） …… 38
第18図　出土石器（2） …… 39
第19図　出土石器（3） …… 40

表目次

第1表　土木工事のための発掘にかかわる行政手続 … 1
第2表　調査のための発掘にかかわる行政手続 … 1
第3表　埋蔵物の発見にかかわる行政手続 …… 2
第4表　受委託契約等の経過 …… 2
第5表　2019年度発掘作業工程 …… 3
第6表　2020年度整理等作業工程 …… 4
第7表　羽場権現堂遺跡周辺遺跡一覧 …… 7
第8表　石器器種組成表 …… 22
第9表　土器観察表 …… 22

写真図版目次

PL1　調査区全景　竪穴建物跡
PL2　竪穴建物跡　土坑
PL3　土坑
PL4　出土土器（1）
PL5　出土土器（2）
PL6　出土土器（3）
PL7　出土土器（4）
PL8　出土土器（5）
PL9　出土石器

第１章　発掘調査の経過

第１節　調査に至る経緯

１　事業計画の概要

中央新幹線（リニア中央新幹線）は電導リニアを採用した、東京都と大阪府を結ぶ総延長約 285km の新幹線の整備計画路線である。日本の大動脈輸送を担う東海道新幹線は、開業から 50 年以上が経過し、鉄道路線の建設・実現に長い期間を要することを踏まえ、将来の経年劣化や大規模災害に対する抜本的な備えとして計画されている。県道飯田南木曽線拡幅は、中央新幹線建設工事に伴い、中央アルプストンネル松川工区の発生土運搬に伴う安全対策の一環として計画された工事である。

２　埋蔵文化財の状況と保護措置の調整

羽場権現堂遺跡の所在する飯田市大休地籍は東海旅客鉄道株式会社（以下　JR 東海）による工事用車両通行に伴う県道飯田南木曽線の道路拡幅予定地にあたる。この工事には大休遺跡、羽場権現堂遺跡が係るため、飯田市教育員会（以下　市教委）によって、2018～2019 年度に埋蔵文化財包蔵地の範囲と内容を確認するための調査が実施された。

その結果、羽場権現堂遺跡に係る個所では、地表から概ね 80～120cm で到達する明黄褐色砂土を検出面として、竪穴建物跡２軒と土坑 15 基が確認された。いずれも縄文時代の土器片、石器等の遺物を伴っており、当該期の遺構が主体とされた。このため、当該箇所は本格的な発掘調査を必要とし、それ以外は同様の調査は不要と市教委が判断した。

市教委による確認調査に基づき、2019 年２月 19 日、事業主体の JR 東海、市教委、長野県教育委員会文化財・生涯学習課（以下　県教委）、長野県埋蔵文化財センター（以下　埋文センター）の四者による保護協議がもたれた。協議では羽場権現堂遺跡に係る記録作成目的の発掘調査主体を埋文センターとし、2019 年度当初から発掘調査に着手する旨の合意を得た。また、調査にあたっては、調査箇所が JR 東海の未買収地であることから、JR 東海による借地契約の後、発掘調査に着手する方針とした。なお、2019 年度当初から発掘作業に着手する予定としたが、事務手続きや地元への事前説明などにより、掘削開始は、５月 20 日となった。

３　行政手続の経過

第１表　土木工事のための発掘にかかわる行政手続（文化財保護法第 93・94 条関係）

年月日	文書番号	施行者	文書名	あて先	備考
2017.10.25	中建名第 827 号	JR 東海	土木工事に伴う埋蔵文化財発掘通知	県教委	羽場権現堂遺跡他での土木工事を通知
2019. 3.22	30 教文第 726 号	県教委	周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について	JR 東海 埋文センター	埋文センターが上記遺跡の発掘調査を受託するよう通知

第２表　調査のための発掘にかかわる行政手続（文化財保護法第 92 条関係）

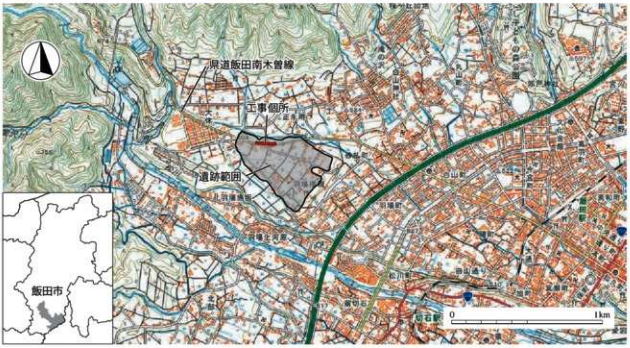
年月日	文書番号	施行者	文書名	あて先	備考
2019. 4.12	31 長埋第 1-2 号	埋文センター	埋蔵文化財発掘調査の届出	県教委	羽場権現堂遺跡の発掘調査
2019. 5. 7	元教文第 6-2 号	県教委	埋蔵文化財の発掘調査について通知	埋文センター	上記発掘調査の実施および終了報告提出等を指示
2020. 2.16	元長埋第 4-1 号	埋文センター	発掘調査終了報告	県教委	500㎡

第３表　埋蔵物の発見にかかわる行政手続（文化財保護法第 102・105・108 条関係）

年月日	文書番号	施行者	文書名	あて先	備考
2019. 7.31	元長埋第 2-1 号	埋文センター	埋蔵物発見届	県教委	土器・石器 18 箱
2019. 8.20	元教文第 20-37 号	県教委	埋蔵物の文化財認定及び出土品の帰属通知	埋文センター	

第４表　受委託契約等の経過

年度	予算	備考
2019	20,441,597 円	発掘作業：500㎡
2020	46,735,191 円	整理等作業：報告書刊行、他遺跡の発掘作業を含んだ年度当初契約額



第１図　遺跡の位置

4　発掘作業と整理等作業の体制

発掘調査にかかわる作業体制（作業員を含む）は以下のとおりである。

2019 年度　発掘作業

所　　長：　原田秀一　　副 所 長：　関崎修二　　調査部長：　平林　彰　　担当課長：　岡村秀雄

調査担当：　藤原直人　　長谷川桂子

作 業 員：　金澤勢津子　中野満里子　中野充夫　西野英利　松浦善文　簑島正三　吉川　豊

2020 年度　整理等作業

所　　長：　原田秀一　　副 所 長：　山田秀樹　　調査部長：　川崎　保　　支 所 長：　岡村秀雄

調査担当：　藤原直人　　鈴木時夫　　平林　彰

作 業 員：　関原孝子　　土屋綾子

第２節　発掘調査の経過

１　発掘作業

遺跡は松川左岸の河岸段丘上に位置し、現在は畑地として利用されている。本格的な調査履歴はない。県道拡幅工事に伴い2018年度に市教委が確認調査を実施した結果、縄文時代の遺構（竪穴建物跡２基、土坑15基、縄文時代の土器片・石器等の遺物）が確認され、縄文時代を主体とする集落が存在する可能性が指摘された。よって、埋文センターは用地内の記録保存のための本格的な調査を行った。

飯田市松川の左岸では縄文時代、弥生時代の遺跡が点在する。同河岸段丘上の周辺には大休遺跡、羽場権現堂前遺跡、砂払遺跡などの縄文時代の遺跡が存在し、本遺跡の東には弥生時代の遺跡である方角東遺跡や羽場曙遺跡などが知られている。また、調査地点周辺で古墳時代、平安時代の土器も出土している。

まず、調査区内を重機により、地表から深さ1.5ｍ前後まで掘削し、人力による遺構の検出を行った。排土は隣接地に仮置きした。調査の結果、縄文時代中期初頭と中期後半の集落跡が確認された。発見された遺構は竪穴建物跡２軒、土坑81基である。これら検出された遺構の埋土を掘り下げ、測量および写真撮影、所見等を記録した。遺物は主に縄文土器（コンテナ10箱）、石器（コンテナ８箱）が出土した。なお、基準点測量等は外部に委託して実施した。

今回、縄文時代中期初頭、中期後半の竪穴建物跡や土坑が発見されたが、縄文時代中期初頭の竪穴建物跡の調査例は飯田地域では稀であることから、貴重な資料の提示をすることができた。また、縄文時代中期後半の竪穴建物跡から出土した土器の中には他地域の特徴を持つ資料が見受けられた。他地域との該期の交流の一端を考える良好な資料となるものと考えている。

第５表　2019年度発掘作業工程

作業内容		4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	備　考
発掘作業	準備	■												
	基準点設定		■											
	トレンチ調査		■											
	表土掘削		■	■										
	遺構検出		■	■										
	遺構精査		■	■	■									
	記録作成		■	■	■									
	後片付け				■									
打合せ・中間検査		△		○										△：打合せ、○：中間検査

２　整理等作業

発掘作業に伴う基礎整理作業期間は設けず、令和２年度に本格整理作業を実施した。

まず、記録類の点検や写真整理などを実施し、記録類や遺物の全体量とその内容把握を行った。各種台帳の不備を整え、遺構図や土層図等の図面修正を施した。

遺物については、種類別に再整理し、遺物台帳等の整備を行い、小型石器の注記を行った。その後、報告書に掲載する遺物の選別・登録を行い、土器接合に着手した。

遺構については調査所見の整理、各遺構の概要を把握するための情報整備、修正図をもとにデジタルトレースなどをし、掲載する個別遺構図・遺構全体図・土層柱状図・周辺遺跡分布図等の作成を進めた。

続いて、報告書に掲載する個別遺構図等の仮版組、遺物の写真撮影を行った。さらに、調査成果の総合的な検討を行い、原稿の作成に取り掛かった。編集会議を行い、統一的な方針を固めて、遺物の実測・トレース、仮版組を行い、原稿や遺物観察表等の作成を行い、報告書の刊行および収納を実施した。

第６表　2020 年度整理等作業工程

作業内容		4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	備　考
遺構	図面編集	■	■	■										
	トレース	■	■	■										
	作表				■									
	版組	■	■	■	■	■								
遺物	遺物選別	■	■	■										
	実測・トレース	■	■	■	■	■								
	作表					■	■	■						
	版組					■	■	■						
写真	写真撮影					■								
	版組						■	■						
記録	原稿執筆	■	■	■	■	■	■	■						
	入稿・校正								■	■				
印刷・発送										■				
収納											■	■	■	

3　普及公開活動

『年報』36（2020 年３月 23 日刊行）にて概要を掲載した。

4　作業日誌抄

2019 年度

4 月 25 日　調査区・駐車場用地地権者へのあいさつ
5 月 7 日　県教委より「埋蔵文化財の発掘調査について」通知
5 月 10 日　プレハブ・トイレ設置及び仮設電気設備工事
5 月 13 日　現地打合せ
5 月 16 日　仮設水道及び安全対策（安全柵）仮設工事
5 月 20 日　作業員雇用開始、重機による表土掘削開始
　　発掘器材搬入
5 月 22 日　竪穴建物跡（SB01）検出
5 月 27 日　竪穴建物跡（SB02）検出
6 月 10 日　SB01 炉跡検出
6 月 19 日　委託測量開始
7 月 3 日　SB02 埋要検出
7 月 10 日　長野県文化財保護審議会委員現地指導
7 月 18 日　重機による埋戻し開始
7 月 19 日　作業員雇用終了
7 月 23 日　現場記録作業終了
7 月 23 日　仮設電気設備撤去工事
7 月 25 日　発掘器材搬出、重機による埋戻し終了
　　仮設水道及び安全対策仮設撤去工事
7 月 29 日　引渡し事前現地打合せ
7 月 30 日　プレハブ・トイレ撤去工事
7 月 31 日　地権者立会いのもと引渡し
　　発掘作業終了

2020 年度

4 月 1 日　本格整理作業開始
　　図面・写真等記録・台帳の点検照合
4 月 6 日　遺物接合、図面整理
4 月 15 日　拓本個体選別、遺跡地図作成
4 月 22 日　土器台帳作成
5 月 1 日　基本土層図作成
5 月 7 日　拓本作成
5 月 11 日　石器分類、原稿執筆
5 月 18 日　遺構図編集
5 月 20 日　石器注記
5 月 27 日　拓本断面図作成
6 月 1 日　土器観察表作成
6 月 5 日　土器復元・補強
7 月 14 日　遺物実測図・トレース委託
8 月 21 日　編集会議
9 月 9 日　遺物実測図・トレース委託納品
9 月 24 日　遺物写真撮影委託開始
9 月 30 日　同　納品
10 月 21 日　発掘調査報告書印刷・製本・発送業務契約
12 月 22 日　発掘調査報告書刊行

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

羽場権現堂遺跡は天竜川右岸、飯田市市街地（飯田駅）から約2.5km西方にあり、長野県飯田市羽場区（大林1575-1ほか）に所在する（第１図）。飯田市は東を赤石山脈（南アルプス）と伊那山地、西を木曽山脈（中央アルプス）に挟まれた伊那谷の南端に位置し、谷の中央を天竜川が南流している。一帯は天竜川による河岸段丘が見られるとともに、断層地塊運動に伴う大規模な段丘崖の形成等が絡み合って複雑な段丘地形を呈している。なお、調査地周辺では市教委による発掘調査により、縄文時代晩期から弥生時代の間に大規模な洪水に見舞われた痕跡である広範囲の黄褐色砂が分布することが指摘されている。

遺跡範囲は東西650 m、南北490 mに広がり、風越山の南麓の松川左岸の河岸段丘上となる。遺跡の北には円悟沢川・熊の洞沢川が流れ、東では元山白山神社（権現堂）の段丘崖となる。現状は集落とリンゴなどの果樹園や野菜畑となっている。

第２節　歴史的環境

羽場権現堂遺跡の発掘現場では、縄文時代中期の遺構と遺物を発見した。本節では本遺跡が所在する飯田市羽場地区を含む旧飯田市内※1と周辺の上郷・鼎・伊賀良地区の遺跡を概観する。第２図の１が羽場権現堂遺跡である。

旧石器時代　飯田市では旧石器時代の遺跡としては、石子原遺跡・竹佐中原遺跡が確認されている。これ以外には断片的に遺物が出土している程度である。本地区周辺では飯田城城跡（32）で美術博物館建設に先立つ調査で黒曜石の細石刃核が見つかっている。また、切石遺跡群（50）では古墳時代の住居跡から硅岩製のナイフ形石器が出土している。

縄文時代　早期では権現堂前遺跡（19）、正永寺原遺跡（22）、押洞遺跡（10）や松川対岸の立野遺跡（76）といった比較的標高の高い場所に立地している遺跡から押型文土器の破片が見つかっている。また、羽場権現堂遺跡に隣接する大休遺跡（24）からは尖底土器が出土している。

前期では伊賀良地区で立野遺跡（76）、小垣外・辻垣外遺跡（86）などがある。中期になると、分布は広がりを見せ、正永寺原遺跡（22）、権現堂前遺跡（19）、押洞遺跡（10）、平沢遺跡（23）、東野宮の前遺跡（５）、飯田城下町遺跡（４）、笄瀬遺跡（３）、松川沿い鼎地区の切石遺跡群（50）や伊賀良地区の北方西の原遺跡（82）、北方大原遺跡（77）、三尋石遺跡（88）などがある。

後期では、権現堂前遺跡（19）で土器・石器・土偶・耳飾り等が出土している。大休遺跡（24）では配石遺構が調査された。松川対岸の酒屋前遺跡（90）では住居跡が確認されている。上郷地区では、日影林遺跡（39）、殿原遺跡（92）などがあげられる。

弥生時代　権現堂前遺跡（19）から前期の条痕文系土器が出土しているが、市内全域をみても前期の遺跡は少ない。後期になると遺跡数が多くなる。権現堂前遺跡（19）や竪穴住居跡・方形周溝墓が確認され方角東遺跡（17）、羽場曙遺跡（18）の他、正永寺原遺跡（22）、古屋垣外遺跡（12）、丸山遺跡（16）など

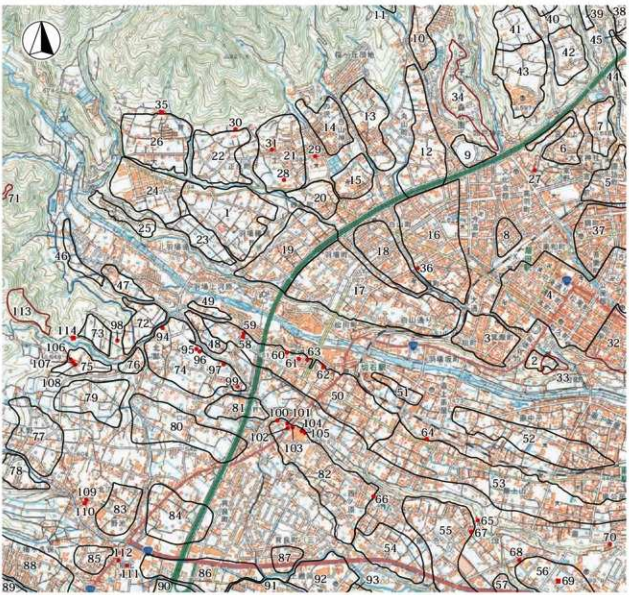
があり、飯田城下町遺跡（４）でも方形周溝墓が調査されている。縄文時代と比べて、遺跡の立地はやや標高的に下がった場所にある。

古墳時代　取り上げた遺跡の半数以上が円墳の古墳で、後世に削平を受けるなどした古墳も多くある。発掘調査がされた古墳は少なく、切石天伯１号・２号古墳（58・59）などがあげられる。集落跡としては切石遺跡群（50）や金谷遺跡（84）などで発掘調査がなされている。

奈良・平安時代　全体的に遺跡の分布が、松川周辺から鼎地区にかけてとなり、方角東遺跡（17）、切石遺跡群（50）、上山遺跡（53）などの集落がある。

中世以降　飯田城下町遺跡（４）、飯田城城跡（32）などの飯田城周辺の遺跡のほかに、愛宕城城跡（33）、今宮城山城城跡（34）、田中居館跡（69）、切石城城跡（71）、桜山城城跡（113）などの居館・中世山城跡などがある。また、丸山遺跡（16）、方角東遺跡（17）、羽場曙遺跡（18）、切石遺跡群（50）、上山遺跡（53）など、調査がなされた遺跡や遺物の散布地も多い。

以上、図表には 114 遺跡を取り上げてあるが、その時代的内訳は旧石器時代１、縄文時代 67、弥生時代 42、古墳時代 68、奈良・平安時代 36、中世 51、近世 59 各箇所となる。縄文時代以降、遺跡周辺一帯は、各時代を通じて、利活用された場所といえよう。



第２図　羽場権現堂遺跡周辺遺跡分布図

第７表　羽場権現堂遺跡周辺遺跡一覧

番号	市町村番号	地区	遺跡名	旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良	平安	中世	近世	種別	面積(ha)	備考
1	**137**	**旧市**	**羽場権現堂**		○	○	○		○	○	○	**散布地**	**18.7**	
2	113	旧市	渕								○	散布地	1.8	
3	114	旧市	笠瀬		◎	◎			◎	○	○	集落跡・その他の墓	9.7	一部発掘調査済
4	115	旧市	飯田城下町		◎	◎	◎		○	◎	◎	集落跡・その他の墓	60.8	一部発掘調査済
5	118	旧市	東野宮の前		◎				○	○	○	集落跡	9.8	一部発掘調査済
6	119	旧市	宮ノ上Ａ		○		○			○	○	散布地	6.1	
7	120	旧市	宮ノ上Ｂ		○	○	○			○	○	散布地	5.3	
8	121	旧市	羽根垣外		○		○					散布地	3.0	
9	122	旧市	今宮		○		○	○		○	○	散布地	3.6	
10	123	旧市	押洞		◎	○	○					その他の遺跡	6.5	
11	124	旧市	ヤツ屋敷		○		○					散布地	1.0	
12	125	旧市	古屋垣外		○	◎				◎	○	集落跡・その他の墓	14.9	一部発掘調査済
13	126	旧市	山の田		○		○				○	散布地	11.0	
14	127	旧市	滝の沢		○	○	○				○	散布地	7.4	
15	128	旧市	阿弥陀寺		○	○					○	散布地	5.6	
16	129	旧市	丸山		○	◎	◎		○	◎	○	集落跡	25.7	一部発掘調査済
17	131	旧市	方角東		○	◎	○		◎	◎	○	集落跡・その他の墓	34.0	一部発掘調査済
18	132	旧市	羽場曙		○	◎	○			◎	◎	集落跡・その他の墓	10.6	一部発掘調査済
19	133	旧市	権現堂前		◎	◎	○		○	○	◎	集落跡・その他の墓	17.3	一部発掘調査済
20	134	旧市	砂払		◎	○	○		○	○	○	集落跡	5.0	一部発掘調査済
21	135	旧市	高越		○	○	○			◎	○	散布地	14.7	
22	136	旧市	正永寺原		○					○	○	散布地	11.2	
23	138	旧市	平沢		○				○	○	○	散布地	5.8	
24	139	旧市	大休		◎	○	○			○	○	集落跡	13.2	一部発掘調査済
25	140	旧市	大休下		◎	◎	○					集落跡・その他の遺跡	3.6	一部発掘調査済
26	141	旧市	羽場西の原		○	○	○			○	○	散布地	15.2	
27	662	旧市	高田古墳				◎					円墳		削平
28	663	旧市	木戸脇古墳				◎					円墳		削平
29	664	旧市	鐘鋳原古墳				◎					円墳		削平
30	665	旧市	正永寺原１号古墳				◎					円墳		削平
31	666	旧市	正永寺原２号古墳				◎					円墳		削平
32	1080	旧市	飯田城城跡							◎	◎	城跡	21.0	一部発掘調査済
33	1081	旧市	愛宕城城跡							◎		城跡	1.5	
34	1082	旧市	今宮城山城城跡							◎		城跡	8.3	
35	1129	旧市	正永寺跡								◎	寺跡		
36	1198	旧市	杵が塚								◎	墓地		残存
37	1219	旧市	鈴加町		◎	◎				◎	◎	集落跡	12.7	一部発掘調査済
38	57	上郷	黒田八幡原		◎				◎		○	集落跡	8.2	一部発掘調査済
39	59	上郷	日影林		◎				◎	○	○	集落跡	3.0	一部発掘調査済
40	60	上郷	黒田柏原Ａ		◎	○			○	○	○	その他の遺跡	8.2	一部発掘調査済
41	61	上郷	黒田柏原Ｂ		○		○			○	○	散布地	6.3	
42	62	上郷・旧市	黒田柏原Ｃ		○				○	○	○	散布地	6.9	
43	63	上郷	黒田柏原Ｄ		○					○	○	散布地	12.7	一部発掘調査済
44	64	上郷	町張		○		○				○	散布地	5.3	
45	65	上郷	赤坂		○	○				○	○	散布地	14.7	一部発掘調査済
46	148	期	山の洞		○						○	散布地	2.9	
47	149	期	切石平林						○		○	散布地	3.3	
48	150	期	樋の沢		○						○	散布地	2.7	
49	151	期	桜瀬		○		○		○		○	散布地	1.4	
50	152	期	切石	○	◎	◎	◎		◎	◎	◎	集落跡・その他の墓	28.6	一部発掘調査済
51	153	期	上茶屋		○				○	○	○	散布地	2.6	
52	154	期	鼎中平		○		◎		○	○	○	集落跡	16.6	一部発掘調査済
53	155	期	上山		◎	◎	◎	○	◎	◎		集落跡	38.1	一部発掘調査済
54	157	期	田井座		◎	◎			○	◎	○	集落跡・その他の墓	11.1	一部発掘調査済
55	158	期	一色		○	◎			○	◎	○	集落跡・その他の墓	21.0	一部発掘調査済
56	159	期	名古熊下		○				○	◎	○	集落跡	18.1	一部発掘調査済
57	160	期	宮久保		○						○	散布地	6.7	
58	667	期	切石天伯１号古墳				◎					円墳		発掘調査済、消滅
59	668	期	切石天伯２号古墳				◎					円墳		発掘調査済、削平
60	669	期	桜瀬古墳				◎					円墳		残存
61	670	期	切石大塚古墳				◎					円墳		削平
62	671	期	切石古墳				◎					円墳		削平
63	672	期	五輪原古墳				◎					円墳		一部発掘調査済、削平

番号	市町村番号	地区	遺跡名	旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良	平安	中世	近世	種別	面積(ha)	備考
64	673	期	堀の内西古墳				◎					円墳		削平
65	675	期	萱垣古墳				◎					円墳		削平
66	676	期	宮の原古墳				◎					円墳		削平
67	677	期	西の原古墳				◎					円墳		削平
68	678	期	神明堂古墳				◎					円墳		削平
69	1084	期	田中居館跡							◎		居館跡		
70	1199	期	稲井大塚								◎	信仰壇		残存
71	1217	期	切石城城跡							◎		城跡	1.0	
72	244	伊賀良	真慶寺原		○				○			散布地	5.7	
73	245	伊賀良	真慶寺原上		○	○			○			散布地	3.3	
74	246	伊賀良	北方北の原		◎	○					○	その他の墓	18.8	一部発掘調査済
75	247	伊賀良	在京原		○	○					○	散布地	3.9	
76	248	伊賀良	立野		◎	○						集落跡	1.9	一部発掘調査済
77	249	伊賀良	北方大原		◎	◎	◎					集落跡	12.4	一部発掘調査済
78	250	伊賀良	河原林		◎	○						集落跡	4.4	一部発掘調査済
79	251	伊賀良	入野		◎	○					○	集落跡	10.5	一部発掘調査済
80	252	伊賀良	山口		○						○	散布地	17.1	
81	253	伊賀良	育良社付近		◎	◎	◎			◎	○	集落跡・その他の墓	5.1	一部発掘調査済
82	254	伊賀良	北方西の原		◎	◎	○	◎	◎	○	○	集落跡	21.8	一部発掘調査済
83	255	伊賀良	北方野池		○	○			○		○	散布地	7.2	
84	256	伊賀良	金谷		◎	◎	◎		◎	◎	○	集落跡	13.0	一部発掘調査済
85	258	伊賀良	文吾林		○					○	○	散布地	3.7	
86	259	伊賀良	小垣外・辻垣外		◎		◎		◎	◎		集落跡	12.7	一部発掘調査済
87	260	伊賀良	八幡面		○	◎	◎		◎	◎		集落跡	2.8	一部発掘調査済
88	266	伊賀良	三尋石		◎	◎			○	○	○	集落跡	21.7	一部発掘調査済
89	267	伊賀良	三尋石南		○	○				○		散布地	17.9	
90	271	伊賀良	酒屋前		◎	◎	○		◎	◎	○	集落跡・その他の墓	9.6	一部発掘調査済
91	280	伊賀良	市場屋敷		○	○			○		○	散布地	15.7	
92	281	伊賀良	殿原		◎	◎	◎		◎	◎		集落跡	9.8	一部発掘調査済
93	282	伊賀良	円通寺北		○	○				◎	○	散布地	7.7	一部発掘調査済
94	891	伊賀良	北方北の原１号古墳				◎					円墳		削平
95	892	伊賀良	北方北の原２号古墳				◎					円墳		削平
96	893	伊賀良	北方北の原３号古墳				◎					円墳		削平
97	894	伊賀良	北方北の原４号古墳				◎					円墳		削平
98	895	伊賀良	真慶寺古墳				◎					円墳		削平
99	896	伊賀良	北の平古墳				◎					円墳		削平
100	897	伊賀良	笛吹１号古墳				◎					円墳		削平
101	898	伊賀良	笛吹２号古墳				◎					円墳		削平
102	899	伊賀良	笛吹３号古墳				◎					円墳		消滅
103	900	伊賀良	笛吹４号古墳				◎					円墳		削平
104	901	伊賀良	南方１号古墳				◎					円墳		削平
105	902	伊賀良	南方２号古墳				◎					円墳		削平
106	903	伊賀良	在京原１号古墳				◎					円墳		削平
107	904	伊賀良	在京原２号古墳				◎					円墳		削平
108	905	伊賀良	在京原３号古墳				◎					円墳		削平
109	907	伊賀良	北方二ツ塚１号古墳				◎					円墳		削平
110	908	伊賀良	北方二ツ塚２号古墳				◎					円墳		削平
111	909	伊賀良	文吾林１号古墳				◎					円墳		削平
112	910	伊賀良	文吾林２号古墳				◎					円墳		削平
113	1089	伊賀良	桜山城城跡							◎		城跡	3.9	
114	1134	伊賀良	観音堂跡								◎			

※１『飯田市遺跡一覧表』（飯田市教委　2019）では地区にある旧市は、1937（昭和 12）年に飯田町・上飯田町が合併して飯田市が発足した当初の橋北・橋南・羽場・丸山・東野の５地区のことである。

※２　表の時期区分で○は遺物確認、◎は遺構確認のことである。

第３章　調査の方法

第１節　発掘作業

調査は県教委の「記録保存を目的とする発掘調査の標準および積算基準」と、当センター作成の「遺跡調査の方針と手順」に即して実施している。

１　遺跡名称と遺跡記号

遺跡名称と遺跡記号は、羽場権現堂遺跡（HABAGONGEN）：「IHG」である。遺跡記号は、調査記録の便宜を図るため、遺跡名をアルファベット３文字で表したもので、１文字目の「Ｉ」は長野県内を10地区に区分し、下伊那郡、飯田市に付与した名称、２文字目と３文字目は遺跡名のローマ字表記２文字を選択したものである。各種記録類や遺物の注記に遺跡記号を用いた。

２　遺構名称と遺構記号

遺構も遺跡記号と同様に、記録の便宜を図るため記号を用いた。遺構名称は調査時に決定するため、遺構の種類・性格に適合しない場合があるが、主に遺構の形状や特徴で区分した。遺構番号は、時代などに関わらず種類ごと、検出順に付けた。一旦記号・番号を付したものは原則として変更してない。調査の結果、遺構でないことが判明したものについては欠番とした。また、調査段階で遺構番号の付いていないかったものについては、整理段階で新たに付与した。今回の調査で用いた遺構記号には、以下の種類がある。

ＳＢ：概ね一辺２ｍを超える方形、長方形、円形、楕円形の掘込み

ＳＫ：単独もしくは他の掘込みとの関係がないＳＢよりも小さな掘込み

なお、ＳＢ内の柱穴・貯蔵穴などはピット（記述・図を問わず個別番号を付す場合「Ｐ」）を付した。

３　調査区とグリッドの設定

国土地理院の平面直角座標第Ⅷ系の原点（Ｘ＝東経 138°30 00″、Ｙ＝北緯 36°00 00）を基点に、200 の倍数値を選んで測量基準線を設け、調査対象範囲全体をカバーするようにグリッドを設定した。

大々地区は、200 × 200 ｍの区画で、西から東へⅠ、Ⅱのローマ数字で表記した。大地区は、大々地区を 40 × 40 ｍの 25 区分に分割したもので、北西から南東へＡ～Ｙのアルファベット番号を与えた。中地区は、大地区を８×８ｍの 25 区分に分割したもので、北西から南東へ１～25 のアラビア数字を与えた。中区画を遺構測量等の基準・単位とした。なお、座標値は、世界測地系である。

また、調査対象地をほぼ中央から２区に分割し、便宜的に１、２区と呼称して調査を進めた。

４　表土の掘削と遺構の検出

調査区内を重機により、地表から 1.5 ｍ前後の深さまで掘削し、人力による遺構検出を行った。検出面は１・２区ともに基本土層Ⅴ層上面で、黄褐色土に黒褐色土等が落ち込む様子で確認した。出土遺物については、遺構が明確となった場所は、遺構ごとに取り上げ、その他は１、２区で一括して取りまとめた。

５　遺構の発掘と記録類の作成

竪穴建物跡の調査は、土層観察用ベルトに沿った先行トレンチで床面を確認するとともに、土層の堆積状況を把握・記録して、埋土を床面まで掘下げ、柱穴、炉などの建物内施設の精査・記録を行った。完掘状態の記録を行った後に床面下（掘方）の状況を確認した。土坑は、埋土を半裁し、土層の堆積状況を観察・記録した後に完掘した。図化記録では、遺構平面図は手測量し図面用紙に記録したものと、業者委託による単点測量を行い、提出された紙出力図に遺構と照合しながら結線を行ったものがある。土層断面図、遺物出土状況図は調査研究員および発掘作業員が手測量で行った。遺構図は縮尺１/20を基本とし、必要に応じて１/10で測量した。また、調査範囲図、地形図は業務委託で作成した。写真記録はフル一眼レフデジタルカメラを用いた。デジタル写真は、ＪＰＥＧとＬＡＷ形式のデータを保存した。発掘作業では撮影記録簿にファイル番号、撮影内容等を記載した。

第２節　整理等作業

１　遺物と記録類の整理

遺物は取上げ単位ごとに台帳登録し、洗浄・クリーニングと注記を行い、材質別に土器・土製品、石器に大別して整理作業を進めた。

土器・土製品は接合を行いながら、観察と分類、破片数と重量の計測を進め、遺構・遺跡の時期や特徴を示すために報告書への掲載が必要な遺物を抽出し、必要に応じて補強と復元を行った。石器は観察・分類を行いつつ、大きさと重量の計測を行い、報告書掲載遺物を抽出した。抽出した遺物は管理番号を付して遺物管理台帳に登録し、観察表を作成した。

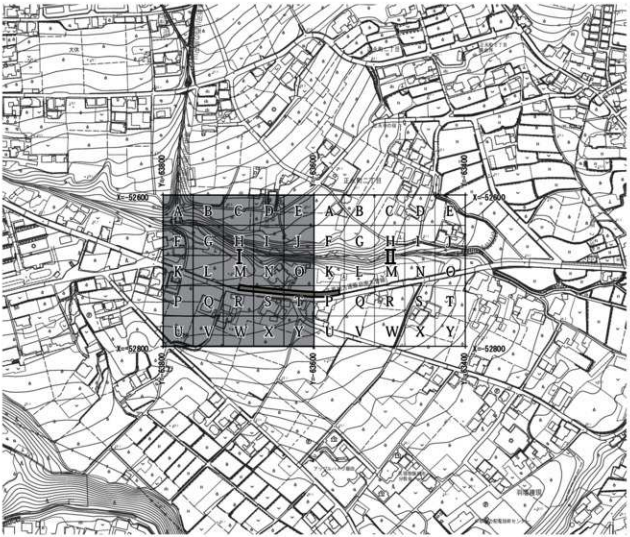
縄文土器は拓本をとり、トレースは埋文センターにおいて製図ペンを用いた手トレースを行った。土器・土製品、石器については業務委託による描画ソフト Illustrator を用いたデジタルトレースを実施した。手トレースした遺物図はデジタルスキャンし、デジタルトレースした遺物図と合わせて、Illustrator を用いてデジタル図版データを作成した。

遺構図面類は原図を台帳に登録するとともに、記載内容を点検・修正しながら整理し、竪穴建物跡など一部の個別図についてはトレースのための２次原図を作成した。修正図や２次原図をもとに、Illustrator を用いてデジタルトレースを行い、個別遺構図、基本土層図、遺構配置図（全体図）などのデジタル図版データを作成した。発掘作業で撮影したデジタル写真は、写真台帳を作成し、発掘年度、撮影日、撮影方向、内容を記載した。デジタル写真はＪＰＥＧおよびＬＡＷデータを撮影順にハードディスクに記録した。遺物写真撮影は業務委託により実施した。撮影にはフル一眼レフデジタルカメラを使用した。

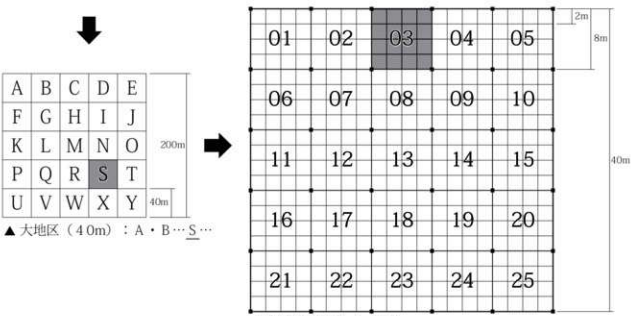
２　報告書作成と資料収納

報告書の本格的な編集作業は、令和２年度に入ってから着手した。報告書作成にあたり、2020 年８月21 日に編集会議を行った。会議で指摘を受けた事項について検討を行い、報告書の内容を整備した。

資料収納は、遺物の材質・種別ごとに報告書掲載遺物と非掲載遺物に分けたうえで、出土遺構・地区等の地点別にテンバコに収納するとともに、遺物収納台帳に登録した。実測図類は手実測遺構図・委託測量図、手実測遺物図、委託実測遺物図に通し番号（図面番号）を付けて図面収納台帳に登録し、図面ファイル等に収納した。埋文センターで作成した写真等のデジタルデータはハードディスクに記録した。業務委託によるデータは、収納時点ではＣＤないしＤＶＤに記録した。



▲ 大々地区（200m）：Ⅰ・Ⅱ



▲ 大地区（４０m）：A・B…S…

▲ 中地区（8m）：ⅠS03

第３図　調査区とグリッドの呼称

第４章　基本層序と遺構・遺物

第１節　基本層序

調査対象地の基本層序は以下のとおりとなる（第４図）。

Ⅰ層　：暗褐色（10YR3/3）シルト。粘性ややあり。しまりなし。小礫を少量混入。耕作土。

Ⅰａ層：黒褐色（10YR2/3）シルト。粘性ややあり。Ⅰ層よりしまりあり、小礫の混入が多い。耕作土。

Ⅱ層　：黒褐色（10YR2/2）シルト。粘性なし。しまりややあり。小礫（径２～８ mm）をⅢ層より多く、白色粒子（径１～３ mm）を少量混入。

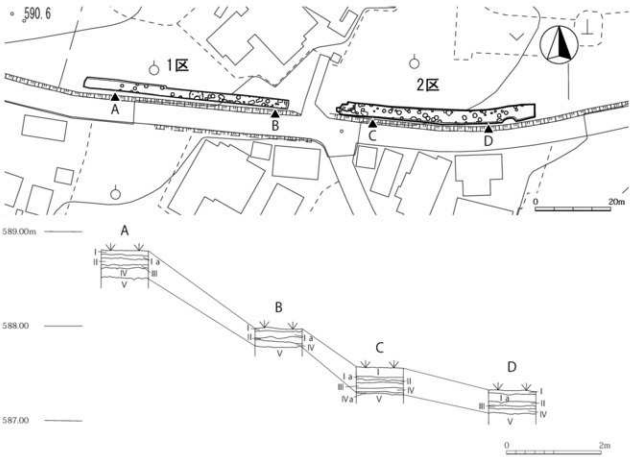
Ⅱａ層：黒褐色（10YR2/3）シルト。粘性なし。しまりあり。Ⅱ層より混入物の割合が多く、色調が暗い。

Ⅲ層　：褐色（10YR4/4）シルト。粘性なし。しまりあり。小礫（径２～10mm）をⅡ層と同程度混入し、白色粒子（径１～３ mm）を微量混入。（１区東側で層厚が薄く、東端部ではほとんど認めない）。

Ⅳ層　：黒褐色（10YR2/2）シルト。粘性なし。しまりややあり。小礫（径２～10mm）・白色粒子（径１～３ mm）をⅡ層より多く混入する。遺物包含層。

Ⅳａ層：黒褐色（10YR3/2）シルト。粘性なし、しまりややあり。Ⅳ層より色調が明るい。小礫（径２～10mm）・白色粒子（径１～３ mm）をⅡ層より多く混入する。遺物包含層。

Ⅴ層　：黄褐色（10YR5/6）シルト。粘性なし、しまりややあり。遺構検出面。



第４図　基本土層図

調査では上記のように基本土層を把握した。Ⅰ層は耕作土である。Ⅲ層は市教委の周辺の本発掘・試掘・立会調査の結果から、縄文時代から弥生時代の間に堆積した洪水砂（黄褐色砂・黄褐色砂質土）と推定する（飯田市教委2003『羽場曙遺跡　方角東遺跡』）。Ⅳ層が遺物包含層で、Ⅴ層上面で遺構を検出した。

第２節　遺構

１　竪穴建物跡

本遺跡では竪穴建物跡（ＳＢ）が２軒検出された。縄文時代中期初頭～中葉１軒・中期後葉１軒である。調査区が東西に細長く、いずれも遺構の全容を調査できていない。

ＳＢ01（遺構：第７図・PL １、土器：第11図・PL ４、石器：第17～19図・PL ９）

位置：１区中央、Ⅰ S02・03グリッド。**検出：**黒褐色土を埋土とする落ち込みを検出した。北・南壁の一部は調査区外となる。**埋土：**レンズ状の堆積、壁際には壁面に沿って黒褐色土、暗褐色土が観察できた。**重複関係：**ＳＫ01に切られるが、本跡の床面は残存する。**構造：**形状は、円形の平面形が想定される。規模は東西方向3.6ｍ、南北方向（2.05）ｍ、検出面からの深さ48cmを測る。床面は地山を利用し、硬い。壁はほぼ垂直で、北東側の一部に若干緩やかな箇所がある。柱穴はＰ１、２、３、４を主柱穴と考えている。周溝は確認できなかった。**埋甕炉：**中期初頭～中葉の深鉢が埋設され、掘方が土器より１～２cm程大きい掘込みである。土器内や掘方内に焼土はみられず、土壌を洗浄し、炭化粒を若干得た。**出土遺物：**中期初頭の土器片を主体に、検出面から30～40cmの深さで出土した。やや大きめの破片もあり、１～２個体分の破片が投棄されたことも推測する。**時期：**出土土器から縄文時代中期初頭～中葉と推測する。

ＳＢ02（遺構：第８図・PL １・２、土器：第11・12図・PL ４・５、石器：第17～19図・PL ９）

位置：２区西、Ⅰ T02・03・07・08グリッド。**検出：**黒褐色土を埋土とする円形の落込みを検出した。西側はカクランにより壊され、北側は調査区外に及ぶ。**埋土：**しまりのある２層が本跡の東側にみられ、その上部に黒褐色土が堆積する。**重複関係：**ＳＫ90、ＳＫ61を切り、ＳＫ91に切られる。**構造：**形状は、遺構の３分の２程度が調査区外となるが、径４～4.5ｍの円形と推測する。検出面からの深さは38cmを測る。床面はやや凹凸があり、貼床と推測する硬化面が部分的に観察でき、他は地山利用である。壁は床面からやや急角度で立ち上がる。壁際に周溝が部分的に認められたがＰ２の方向に延びる部分は床面検出時に明瞭ではなく、旧建物跡に伴う周溝の可能性もある。**炉：**不明である。調査区外に存在すると推測している。**出土遺物：**埋甕を２基検出した。１基は南東壁寄り（埋甕１）（15）、１基は南壁寄り（埋甕２）（14）である。埋甕２は甕の口縁部が床面精査時に明確にできず、掘方調査時に検出でき、旧建物跡に伴う埋甕の可能性もある。**時期：**出土土器から縄文時代中期後葉と推測する。

２　土坑

土坑（ＳＫ）は基本層序Ⅴ層上面で黒褐色土の落ち込みとして、81基を検出した。ここでは、遺構の時期が特定できる遺物が出土した土坑、あるいは形状規模等で特徴を有する事例について記述し、その他は、観察表を参照されたい。主な時期は、出土土器から縄文時代中期初頭～中期後葉と推測した。

ＳＫ01（遺構：第９図・PL ２、土器：第13図・PL ５、石器：第17・18図・PL ９）

位置：１区中央、Ⅰ S02・03グリッド。**検出：**ＳＢ01埋土内で黒褐色土の円形の落ち込みを確認した。**重複関係：**ＳＢ01を切る。**形状・規模：**長軸（91）cm、短軸160cm、深さ28cmを測り、円形を呈す

る。南側は調査区外におよぶ。**遺物**：縄文中期初頭の土器が５点と、打製石斧（７）・横刃形石器（22）・石鏃（３）、下呂石や黒曜石片が十数点出土した。**時期**：縄文時代中期初頭と推測する。

ＳＫ 10（遺構：第９図、土器：第13図・PL ６）

位置：１区東、Ⅰ S10 グリッド。**形状・規模**：長軸 35cm、短軸 27cm、深さ 20cm を測り、楕円形を呈する。**遺物**：縄文時代中期初頭の土器（33）が出土した。**時期**：出土土器から縄文時代中期初頭と推測する。

ＳＫ 13（遺構：第９図・PL ２、石器：第17・18図・PL ９）

位置：１区東、Ⅰ S05 グリッド。**形状・規模**：長軸 102cm、短軸 92cm、深さ 25cm を測り、円形を呈する。**遺物**：打製石斧（９・11）、横刃形石器（23）が出土した。**時期**：縄文時代と考える。

ＳＫ 14（遺構：第９図、土器：第13図・PL ６）

位置：１区東、Ⅰ S10 グリッド。**重複関係**：ＳＫ 15 を切る。**形状・規模**：長軸 97cm、短軸（53）cm、深さ 46cm を測り、円形を呈する。**遺物**：縄文時代中期初頭～中葉の土器（34）が出土した。**時期**：縄文時代中期初頭～中葉と推測する。

ＳＫ 15（遺構：第９図・PL ２、土器：第13図・PL ６）

位置：１区東、Ⅰ S05・10 グリッド。**重複関係**：ＳＫ 14 に切られる。新旧の判断は平面では困難で、断面観察により判断した。**形状・規模**：長軸（82）cm、短軸 81cm、深さ 27cm を測り、楕円形を呈する。**遺物**：底面付近から埋土中層で縄文時代中期初頭～中葉の半完形の深鉢（35）が出土した。**時期**：縄文時代中期初頭～中葉と推測する。

ＳＫ 16・17（遺構：第９図・PL ２、石器：第17図・PL ９）

位置：１区東、Ⅰ S04・05 グリッド。**重複関係**：ＳＫ 16・17 の前後関係は不明。**形状・規模**：ＳＫ 16 は長軸（72）cm、短軸 65cm、深さ 24cm を測り、楕円形を呈する。ＳＫ 17 は長軸（108）cm、短軸 94cm、深さ 30cm を測り、円形を呈する。**遺物**：ＳＫ 17 から打製石斧（10）が出土した。**時期**：不明である。

ＳＫ 22（遺構：第９図・PL ２、土器：第13図・PL ６）

位置：１区東、Ⅰ S04 グリッド。**形状・規模**：長軸（156）cm、短軸（85）cm、深さ 33cm を測り、楕円形を呈する。**遺物**：縄文時代中期後葉の浅鉢（37）と敲石が出土した。**時期**：縄文時代中期後葉と推測する。

ＳＫ 23・24（遺構：第９図）

位置：１区東、Ⅰ S04 グリッド。**重複関係**：ＳＫ 23 がＳＫ 24 を切る。**形状・規模**：ＳＫ 23 は長軸 98cm、短軸（48）cm、深さ 27cm を測り、円形を呈する。ＳＫ 24 は長軸（59）cm、短軸（44）cm、深さ 15cm を測り、円形を呈する。**遺物**：なし。**時期**：不明である。

ＳＫ 25（遺構：第９図・PL ２、土器：第13図・PL ６）

位置：１区東、Ⅰ S03 グリッド。**形状・規模**：長軸 120cm、短軸（64）cm、深さ 30cm を測り、楕円形を呈する。南側は一部が調査区外におよぶ。**遺物**：縄文時代中期初頭の深鉢の半完形品（38）が出土した。**時期**：縄文時代中期初頭と推測する。

ＳＫ 26（遺構：第９図、土器：第13図・PL ６）

位置：１区東、Ⅰ S03 グリッド。**重複関係**：ＳＫ 27 との前後関係は不明。**形状・規模**：長軸（76）cm、短軸 86cm、深さ 15cm を測り、楕円形を呈する。**遺物**：縄文時代中期初頭の土器片（39）と、打製石斧が出土した。**時期**：縄文時代中期初頭と推測する。

ＳＫ 27（遺構：第９図・PL ３）

位置：１区東、Ⅰ S03 グリッド。**重複関係**：ＳＫ 26 との前後関係は不明。**形状・規模**：長軸 158cm、短軸（92）cm、深さ 54cm を測り、長楕円形を呈する。底面はほぼ平坦な面である。**遺物**：土器はないが、底面近くには自然礫が 11 点まとまって出土した。**時期**：不明である。

ＳＫ 29・30（遺構：第９図）

位置：１区中央、Ｉ S03 グリッド。**重複関係：**ＳＫ 30 がＳＫ 29 を切る。**形状・規模：**ＳＫ 29 は長軸 89cm、短軸 81cm、深さ 27cm を測り、円形を呈する。ＳＫ 30 は長軸 110cm、短軸 97cm、深さ 19cm を測り、不整円形を呈する。**遺物：**なし。**時期：**不明である。

ＳＫ 37（遺構：第９図）

位置：１区西、Ｉ R05・S01 グリッド。**形状・規模：**長軸 76cm、短軸（38）cm、深さ 11cm を測り、楕円形を呈する。**遺物：**なし。**時期：**不明である。

ＳＫ 40（遺構：第９図、土器：第 13 図・PL ６）

位置：１区西、Ｉ R05 グリッド。**形状・規模：**長軸 85cm、短軸 76cm、深さ 36cm を測り、円形を呈する。**遺物：**縄文時代中期初頭の土器（40～44）５点は、摩耗と剥離が著しいが東海系の北裏Ｃ式と考える。また、打製石斧、横刃形石器が出土した。**時期：**縄文時代中期初頭と推測する。

ＳＫ 61（遺構：第９図・PL ３、土器：第 14 図・PL ６・７、石器：第 17・18 図・PL ９）

位置：２区西、Ｉ T08 グリッド。**重複関係：**ＳＢ 02 に切られる。**形状・規模：**長軸（108）cm、短軸 103cm、深さ 31cm を測り、隅丸方形を呈する。**遺物：**縄文時代中期初頭～中葉の平出３Ａ式（47～50）と集合沈線文系土器（45・46・51～53）と打製石斧（12・13）、横刃形石器（24）が出土した。**時期：**縄文時代中期初頭～中葉と推測する。

ＳＫ 65（遺構：第９図、土器：第 14 図・PL ７）

位置：２区西、Ｉ T08 グリッド。**形状・規模：**長軸 66cm、短軸 52cm、16cm を測り、不整形を呈する。**遺物：**土製円盤（55）が１点出土した。**時期：**縄文時代中期と推測する。

ＳＫ 68（遺構：第９図）

位置：２区西、Ｉ T08 グリッド。**形状・規模：**長軸 83cm、短軸（74）cm、深さ 31cm を測り、円形を呈する。**遺物：**なし。**時期：**不明である。

ＳＫ 70（遺構：第９図、土器：第 14 図・PL ７）

位置：２区西、Ｉ T08 グリッド。**形状・規模：**長軸（94）cm、短軸（56）cm、深さ 31cm を測り、北側は調査区外におよぶ。残存部で楕円形を呈する。**遺物：**爪形文の施された縄文時代中期初頭の東海系土器（56）が出土した。**時期：**縄文時代中期初頭と推測する。

ＳＫ 75（遺構：第９図・PL ３、土器：第 14 図・PL ７、石器：第 19 図・PL ９）

位置：２区西、Ｉ T09 グリッド。**形状・規模：**長軸 84cm、短軸 83cm、深さ 58cm を測り、円形を呈する。**遺物：**縄文時代中期初頭～中葉の土器（57～59）が３点と、石鏃（28）が１点出土した。**時期：**縄文時代中期初頭～中葉と推測する。

ＳＫ 76・77（遺構：第９図）

位置：２区西、Ｉ T09 グリッド。**重複関係：**ＳＫ 76 がＳＫ 77 を切る。**形状・規模：**ＳＫ 76 は長軸 91cm、短軸 84cm、深さ 27cm を測り、円形を呈する。ＳＫ 77 は長軸（58）cm、短軸 52cm、深さ 15cm を測り、円形を呈する。**遺物：**ＳＫ 77 から縄文地文の土器が２点と台石が出土した。**時期：**出土した土器は縄文時代中期と推測するが、小片のため両遺構の時期は不明である。

ＳＫ 86・87（遺構：第 10 図）

位置：２区中央、Ｉ T10 グリッド。**重複関係：**調査範囲内では単独である。**形状・規模：**ＳＫ 86 は長軸（41）cm、短軸 110cm、深さ 28cm を測り、円形を呈する。ＳＫ 87 は長軸 168cm、短軸（78）cm、深さ（164）cm を測り、円形を呈し、すり鉢状に深くなる。**遺物：**なし。**時期：**不明である。

ＳＫ 90（遺構：第 10 図・PL ３、土器：第 15 図・PL ７）

位置：２区西、Ⅰ T07 グリッド。**重複関係**：ＳＢ 02 に切られる。**形状・規模**：長軸（83）cm、短軸（39）cm、深さ 18cm を測り、円形を呈する。**遺物**：平出３Ａ式土器（60・61）が２点出土した。**時期**：出土土器から縄文時代中期初頭～中葉と推測する。

ＳＫ 91（遺構：第 10 図・PL ３、土器：第 15 図・PL ７）

位置：２区西、Ⅰ T08 グリッド。**重複関係**：ＳＢ 02 を切る。**形状・規模**：長軸（42）cm、短軸（29）cm、深さ 32cm を測り、円形を呈する。**遺物**：半完形の土器（62）を１点と底部付近から破損した石皿が１点出土した。**時期**：縄文時代中期後葉と推測する。

ＳＫ 92・93（遺構：第 10 図、土器：第 15 図・PL ７）

位置：２区中央、Ⅰ T10 グリッド。**重複関係**：単独。**形状・規模**：ＳＫ 92 は長軸 104cm、短軸 104cm、深さ 28cm を測り、円形を呈する。ＳＫ 93 は長軸 122cm、短軸 100cm、深さ 25cm を測り、楕円形を呈する。**遺物**：ＳＫ 93 から、浅鉢（64）と外来系と考える深鉢片（63）が出土した。**時期**：ＳＫ 92 は不明、ＳＫ 93 が縄文時代中期初頭と推測する。

ＳＫ 96（遺構：第 10 図、土器：第 15 図・PL ７）

位置：２区中央、Ⅰ T10・Ⅱ P06 グリッド。**形状・規模**：長軸 111cm、短軸（64）cm、深さ４ cm を測り、南側は調査区外におよぶ。残存部は楕円形を呈する。**遺物**：土器（65）１点と打製石斧３点・横刃形石器１点が出土した。**時期**：縄文時代中期初頭と推測する。

ＳＫ 97・98（遺構：第 10 図・PL ３、土器：第 15 図・PL ７、石器：第 19 図・PL ９）

位置：２区中央、Ⅰ T10 グリッド。**重複関係**：ＳＫ 98 がＳＫ 97 を切る。**形状・規模**：ＳＫ 97 は長軸 108cm、短軸 105cm、深さ 22cm を測り、円形を呈する。ＳＫ 98 は長軸 100cm、短軸 98cm、深さ 23cm を測り、円形を呈する。**遺物**：ＳＫ 98 から、細隆線文（66）と他系統と推測する土器片（67）と石皿（35）、下呂石剥片が出土した。**時期**：ＳＫ 97 は不明、ＳＫ 98 が縄文時代中期中葉末と推測する。

ＳＫ 106（遺構：第 10 図、土器：第 15 図・PL ８）

位置：２区東、Ⅱ P07 グリッド。**形状・規模**：長軸 96cm、短軸 77cm、深さ 69cm を測り、不整円形を呈する。**遺物**：土器（68）が１点と横刃形石器が出土した。**時期**：縄文時代中期後葉と推測する。

ＳＫ 109（遺構：第 10 図、土器：第 15 図・PL ８）

位置：２区東、Ⅱ P07 グリッド。**形状・規模**：長軸 62cm、短軸 38cm、深さ 52cm を測り、長楕円形を呈する。**遺物**：土製円盤（69）１点が出土した。**時期**：縄文時代中期と推測する。

ＳＫ 116（遺構：第 10 図、土器：第 15 図・PL ８）

位置：２区東、Ⅱ P08 グリッド。**形状・規模**：長軸 62cm、短軸 54cm、深さ 26cm を測り、円形を呈する。**遺物**：土器片（70）１点が出土した。**時期**：縄文時代中期初頭と推測する。

ＳＫ 117（遺構：第 10 図・PL ３、土器：第 15 図・PL ８、石器：第 17 図・PL ９）

位置：２区東、Ⅱ P07・08 グリッド。**形状・規模**：長軸 93cm、短軸 89cm、深さ 36cm を測り、不整円形を呈する。**遺物**：土器（71）１点と石鏃未成品（４）１点が出土した。**時期**：縄文時代中期初頭と推測する。

ＳＫ 118（遺構：第 10 図・PL ３、石器：第 18・19 図・PL ９）

位置：２区東、Ⅱ P08 グリッド。**形状・規模**：長軸 94cm、短軸 88cm、深さ 53cm を測り、不整円形を呈する。**遺物**：石錘（30）、打製石斧（14）、磨製石斧（16）、横刃形石器（26）が出土した。**時期**：縄文時代中期と推測する。

ＳＫ 121（遺構：第 10 図、土器：第 15 図・PL ８）

位置：２区東、Ⅱ P08 グリッド。**形状・規模**：長軸 78cm、短軸 30cm、深さ 68cm を測り、北側は調査区外におよぶ。残存部では円形を呈する。**遺物**：縄文時代中期初頭の土器（72～75）が４点出土した。**時**

期：縄文時代中期初頭と推測する。

第３節　遺物

出土遺物は、ＳＢ01が縄文時代中期初頭～中葉、ＳＢ02が縄文時代中期後葉の所産である。土器の総量は図化したものは89点、石器38点、縄文時代以外の遺物は出土していない。

１　土器・土製品（第11～16図、PL ４～８）

土器の器形は深鉢が主体を占め、浅鉢が３点、壺１点、土製円盤３点が出土した。時代区分は、以下のとおりである。

中期初頭：五領ヶ台式土器、平出３Ａ式土器、外来系の船元式土器、北裏Ｃ式土器

中期中葉：平出３Ａ式土器、貉沢式土器、新道式土器

中期後葉：下伊那唐草文土器Ⅲ

１区ではＳＢ01を中心に中期初頭・中葉の土器が多く出土し、２区ではＳＢ02を中心に中期後葉の土器が出土している。土器の時期区分については（宮崎・綿田2013）に準拠した。

ＳＢ01（第11図、PL ４）

１は埋甕炉で、床面の中央から出土している。上部には半裁竹管による連続刺突のある横位の半隆起線と横位の平行沈線（１条）、胴部では４単位の環状貼付文と逆Ｕ字状隆帯・蛇行する隆帯がそれぞれ２単位交互に貼付られ、その隆帯の間に８単位の縦位平行沈線（２条）が施される。地文は無文である。２は浅鉢で、口縁部に三角状突起を有し、地文のＲＬの縄文に横位平行沈線（１条）、胴部では横位平行沈線（１条）と縦位平行沈線（２条）が描かれる。３は波状口縁（４単位）で、口縁部には地文のＲＬの縄文上に円形突起が施される。頸部にかけては縦位平行沈線文の後、横位平行沈線文が施され、胴上部には横位平行沈線文をＵ字状沈線により区画し、三叉部には刺突が施されている。胴下部では横位平行沈線が縦位平行沈線で区画されている。中期初頭の集合沈線文系の系譜を引くものと考えられる。４は横位の結節のある隆帯が２本水平に施され、その間には斜行沈線が充填され、胴部では縦位の平行沈線がみられる。５は刻み目のある縦位の隆帯が１条、地文には綾杉文が充填される。６は口縁部には刺突が巡り、横位の隆帯と連続する爪型文のある縦位の隆帯で方形のモチーフが描かれ、その内部は平行の半隆起線と縦位の沈線が充填されており、縄文時代中期中葉３期（貉沢式）の特徴を備えている。７は口縁部に２条の連続する爪型文が刻まれた半隆起線文がみられる。８は連続する逆三角形の刺突が施された口縁部片。９は横位の連続する爪型文と横位の三角刺突文が施されている。10は２条の横位の半隆起線文と縦位の沈線が施され、地文はＲＬの縄文、胴部には剥落した隆帯の痕跡が残っている。出土した土器は、縄文時代中期初頭～中葉の２・３期で、平出３Ａ式が主体である。

ＳＢ02（第11～12図、PL ４・５）

11は口縁部には円形の区画内に沈線文による唐草文が配され、胴部には沈線による逆Ｕ字状の区画が描かれ地文は綾杉状沈線である。12は口縁部に円形の区画で、区画内には縦位沈線が充填されている。胴部には縦位沈線（３条）と綾杉状沈線が施されている。13は壺型といえる器形で、口縁部は折り返され肥厚している。頸部には上下を沈線が施された波状の隆帯が巡り、胴部はＲＬの縄文を地文とし、単沈線による渦巻き状の模様が描かれている。14は埋甕２で、検出時に床面が土器の上を覆っていたことから、15の埋甕が埋設される前の旧埋甕と判断した。土器は口縁部に縄文の充填された円形の区画（10単位）、

胴部にはＲＬの縄文が地文として３条の縦位沈線が描かれる。15は埋甕１で、床面調査時に検出したことから本跡に伴う埋甕と判断した。口縁部（無文）直下に横位隆帯と連続する刺突（２列）、胴部には縄文のＲＬ地文に縦位隆帯区画（６区画）と胴部中位には横位隆帯により上下に区画され、区画内には縦位蛇行沈線と綾杉状の沈線が施される。16は円形の区画内に円形の刺突、胴部には綾杉文の充填された逆Ｕ字状の区画がみられる。17は縦位の沈線が充填された円形区画の施された土器である。18は２条の垂下する沈線で、地文には細い沈線による綾杉文が施される。19は波状口縁で環状の突起を有し、地文にＲＬの縄文が施され、その下部には横位の平行沈線と逆Ｕ字状の沈線がみられる。20は口縁部には縦位の沈線が描かれた円形区画、胴部には縦位の沈線と綾杉文がみられる。21は隆帯による渦巻き文と斜行沈線が施される。22は縦位の３条の沈線に地文は綾杉文が描かれている。23は口唇部には沈線、口縁部には円形刺突が施された円形区画、胴部には縦位の沈線とＲＬの縄文が地文として施されている。24は沈線が充填された円形区画文。25は縦位の撚糸文が地文として施されている。26は三角形の区画内に連続する押引きの刺突文がみられる。27は斜行する沈線が充填された楕円形の区画文。19は２・３期の平出３Ａ式、26は３・４期の貉沢・新道式並行である。両者は混入したものと考えられる。ほかの土器については縄文時代中期後葉の12・13期に比定される。

ＳＫ01（第13図、PL５）

28は口唇部に三角形の連続する刺突、また口縁部には連続する爪型文が施された横位の半隆起線文２条がみられる。29は口唇部に連続する爪型文、その直下には横位の結節沈線が巡り、さらに胴部には斜行する沈線が施される。30は口唇部に三角状突起を有し、その下部には縦位の隆帯文が残る。胴部には縦位の平行沈線が施される。31は口唇部に刺突、その下部には横位の沈線と三角印刻文がみられる。32は地文にＬＲの縄文が施され、その上に円形の刺突がみられる。ＳＫ01の時期は出土した土器から縄文時代中期初頭に比定される。

ＳＫ10（第13図、PL６）

33は平行沈線、斜行沈線が充填され、さらに逆Ｕ字状の沈線が施される。時期は縄文時代中期初頭１・２期と考えられる。

ＳＫ14（第13図、PL６）

34は波状の口縁部で、縦位の隆帯が４条と蛇行する沈線文がみられる地文には縄文が施される。また横位の蛇行する沈線が認められる。時期は縄文時代中期初頭～中葉の２・３期と考えられる。

ＳＫ15（第13図、PL６）

35は口縁部に４単位の円形突起を有し、突起からは連続刺突のある隆帯が垂下している。また、水平方向の連続刺突が口縁部には２列、頸部には１列施され、口縁部から頸部にかけて縦位平行沈線、胴部上部には横位平行沈線２条みられる。縄文時代中期初頭～中葉２・３期の平出３Ａ式に比定される。36は横位の半隆起線文の上に連続する爪型文、また平行する半隆起線文が施される。縄文時代中期初頭の東海系である北裏Ｃ式の可能性がある。

ＳＫ22（第13図、PL６）

37は４単位の波状口縁を有する浅鉢で、波頂部を欠いている。口縁部には斜行する短沈線と横位の半隆起線文（２条）、波頂部下に横位半隆起線を充填した縦位方形区画が施される。胴部は無文。縄文時代中期後葉の12・13期と考えられる。

ＳＫ25（第13図、PL６）

38は上端部では爪形文を有する横位の半隆起線文が描かれ、頸部上部では横位平行沈線を弧状・Ｌ字状・逆Ｌ字状の沈線で区画し、頸部下部では押引きのある横位平行沈線（１条）により斜行平行沈線の充

填、胴上部では、押引きのある横位平行沈線（２条）で区画し、縦位の平行沈線上に横位沈線が描かれている。胴下部では横位平行沈線とＵ字状の平行沈線により抉状突起のある三叉文が施されている。いわゆる集合沈線文系で縄文時代中期初頭２期と考えられる。

ＳＫ 26（第13図、ＰＬ６）

39は横位の結節沈線が施された半隆起線文で、その下部には横位の半隆起線文がみられる。時期は縄文時代中期初頭１・２期と考えられる。

ＳＫ 40（第13図、ＰＬ６）

40は横位の連続する爪型文の施された半隆起線文で、地文は無文である。41～44は連続する爪型文が施された半隆起線文である。時期は縄文時代中期初頭の北裏Ｃ式と考えられる。

ＳＫ 61（第14図、ＰＬ６・７）

45は短い縦位平行沈線を横位平行沈線で区画している。地文は無文である。46は横位の平行沈線をＵ字状の平行沈線で区画。地文はＲＬの縄文が施される。47は三角刺突のある突起が口唇部に貼り付けられ、地文にはＲＬの縄文が施される。また、２条の横位平行沈線と斜位の平行沈線がみられる。48と同一個体である。51は口縁部に突起のある集合沈線文系である。52・53は横位の半隆起線文と縦位短沈線が施されている。同一個体とみられる。54は47～50と同一時期の底部片であろう。時期は45・46・51～53が縄文時代中期初頭～中葉２・３期の集合沈線文系の系譜を引いた土器で、47～50は平出３Ａ式と考えられる。

ＳＫ 65（第14図、ＰＬ７）

55は沈線と地文にＬＲの縄文が残る土製円盤である。時期は縄文時代中期と推測する。

ＳＫ 70（第14図、ＰＬ７）

56は口唇部直下には１条の横位沈線、また、連続する爪型文が施された横位の隆帯が２条、隆帯間は無文である。時期は縄文時代中期初頭の東海系北裏Ｃ式と考えられる。

ＳＫ 75（第14図、ＰＬ７）

57は隆帯による円形区画と沈線による同心円状のモチーフが描かれる。58は縦位の沈線で、地文にＬＲの縄文が施されている。59は弧状の沈線文、連続する爪型文の施された半隆起線文と斜行沈線文がみられる。時期は縄文時代中期初頭～中葉２・３期であろうか。

ＳＫ 90（第15図、ＰＬ７）

60は波状口縁（４単位）で波頂部に突起（縦３本、横１本を組み合わせた短隆帯）を貼り付け、口縁部では縦位沈線を横位沈線で区画し、頸部では横位平行沈線を縦位平行沈線とＵ字状沈線で区画している。61は波状口縁を呈し、横位の平行沈線上に弧状の貼り付け文とその下部には弧状の沈線大小２段が施され、大の方の沈線は縦位の沈線と重なっている。また、口縁部から頸部には縦位の平行沈線さらにその下部には横位平行沈線にＵ字状の平行沈線が描かれている。地文はＲＬの縄文である。遺構の時期は縄文時代中期初頭～中葉２・３期の平出３Ａ式である。

ＳＫ 91（第15図、ＰＬ７）

62は口縁部では縦位平行沈線と横位平行沈線が施され、頸部では横位平行沈線を縦位平行沈線とＵ字状沈線の組合せにより区画されている。地文はＲＬの縄文である。縄文時代中期後葉の12・13期である。

ＳＫ 93（第15図、ＰＬ７）

63は半隆起線文で地文にはＬＲの縄文が施され、縦位の平行沈線がみられる。胎土は灰白色を呈していることから在地産ではなく、縄文時代中期初頭の東海系土器の可能性が高い。64は浅鉢の口縁部片で、結節沈線と横位沈線がみられ、その下部には三角印刻文が施されている。縄文時代中期初頭１・２期の所

産と考えられる。

ＳＫ 96（第15図、PL ７）

65は口縁部に縦位沈線のある環状突起が貼り付けられ、横位の半隆起線文、縦位沈線が施されている。時期は縄文時代中期初頭の１期に位置づけられる。

ＳＫ 98（第15図、PL ７）

66は縦位とＶ字状の細隆起線文土器で、縄文時代中期中葉末の９期の所産。67は三角状突起、縦位の結節隆帯、その下部には横位の交互刺突文、菱形に区画されたと考えられる弧状の平行沈線が施されており、縄文時代中期初頭２期に位置づけられる。66の摩耗が著しいことから、混入したものと思われる。

ＳＫ 106（第15図、PL ８）

68は縦位の半隆起線文による区画と結節回転文が施される。遺構の時期は縄文時代中期後葉12・13期の親田式と考えられる。

ＳＫ 109（第15図、PL ８）

69は無文の土製円盤で、時期は縄文時代中期と推測する。

ＳＫ 116（第15図、PL ８）

70は口縁部に横位半隆起線文、胴部には縦位の半隆起線文が施されている。遺構の時期は縄文時代中期初頭２期に比定される。

ＳＫ 117（第15図、PL ８）

71は口唇部に結節沈線、その下部には平行結節状沈線文が施されている。遺構の時期は縄文時代中期初頭１期に比定される。

ＳＫ 121（第15図、PL ８）

72は４角形あるいは５角形の多角形の張り出しを持つ底部片で、地文にはＬの縄文が斜位に施されている。遺構の時期は縄文時代中期初頭で、近畿・中四国系の船元式に比定される。73は平行沈線を用いて口唇部に横位半隆起線文、その下部に斜位半隆起線文と鋸歯状の半隆起線文、胴部との境には横位の半隆起線文と縦位の平行沈線が描かれている口縁部片である。74は平行沈線が斜格子状に施され、さらに下部には縦位の平行沈線がみられる。75は縦位沈線、横位の半隆起線文、胴部には縦位の沈線と横位の沈線が描かれる。遺構の時期は73～75の土器から縄文時代中期初頭１期と考えられる。

遺構外遺物（第16図、PL ８）

76・77は縦位の平行沈線と横位の２条の平行沈線が施される。78・79は縦位の平行沈線と横位の２条の平行沈線、横位の蛇行する沈線が認められる。76・77とは接合しないが、同一個体の可能性が考えられる。時期は縄文時代中期初頭～中葉２・３期の平出３Ａ式。

80は隆帯による楕円区画が描かれ、隆帯の脇にはＤ字状の工具により連続する押引き文が施されている。遺物の時期は、縄文時代中期中葉３・４期。81は沈線による楕円区画が施され、区画の内外には横位の沈線が描かれる。遺物の時期は縄文時代中期後葉12・13期と考えられる。82は無文の円形区画が施された口縁部片で、縄文時代中期後葉12・13期が考えられる。83は縦位の結節縄文が施された縄文時代中期後葉12・13期の親田式と考えられる。84は縦位の２条の沈線によって区画され、区画内は綾杉文が施された胴部片。遺物の時期は縄文時代中期後葉12・13期と考えられる。85～87は接合関係はないが、同一個体と考えられる。口縁部は折り返しを持つ深鉢である。地文にはＲＬの縄文が施される。遺物の時期は縄文時代中期前半と考えられる。88は横位の半隆起線と半隆起線による円形区画が施され、地文にＲＬの縄文が施されている。遺物の時期は縄文時代中期初頭～中葉２・３期。89は地文にＲＬの結節縄文が施された土製円盤で、遺物の時期は縄文時代中期と推測される。

2　石器（第17～19図、PL 9）

調査で得られた石器・石片類は黒曜石チップ類5点を除いて238点である。このうち器種分類した石器は164点で、出土地点別数量としては1区70点・2区94点、遺構内117点・遺構外47点が出土した。石器の遺構別出土量は、ＳＢ01（23点）、ＳＢ02（33点）と竪穴建物跡からの出土量が多い。土坑ではＳＫ118（7点）で最も多く出土している。遺構内出土が多いことから、石器の属する時期は検出遺構に基本的に違わない時期と考えている。

出土石器の器種組成は第8表のとおりである。打製石斧が48点と最も多く、次に横刃形石器33点で、出土石器の約半数を占める。一方、石鏃は4点、石鏃未成品が4点と少ない。石錘は6点出土した。全体的にみて、採集具が多く、狩猟具が少なく、漁猟具も持っていた生活のあり様が窺える。なお、器種分類は飯田市川路大明神原遺跡（埋文センター2010）に準拠した。石器図版は、器種ごとに選別して38点を図化した。なお、個別の計測値等の観察結果は「石器観察表」に示し、添付ＤＶＤに収録した。

（1）石鏃、石鏃未成品、石匙（第17図、PL 9）

石鏃4点、石鏃未成品4点、石匙2点が出土した。1～3はいずれも欠損品で無茎の石鏃である。4は未成品で整形途中に欠損が生じたと推測するが、先端部を錐として利用した可能性もある。5は石匙で、横形で両面からの加工により、つまみ部を作出している。石材は1・2が黒曜石、3～5が下呂石である。

（2）打製石斧（第17・18図、PL 9）

48点出土した。このうち欠損品は39点で、欠損部位が刃部および下半部となるものが27点を数え、7割となる。欠損品が多く確定的でないが、いわゆる撥型・分銅型はみられず短冊型が主である。石材は緑色岩が27点と半数を占め、次いで堅砂岩・硬砂岩が17点である。このうち素材が緑色岩の場合、摩耗痕や潰れ痕が多々観察できた。掲載資料の石材は11の硬砂岩以外、緑色岩である。

（3）磨製石斧（第18図、PL 9）

6点出土した。15は縦に半割した欠損品で、敲石に転用されている。16は基部欠損した石斧を全体的に再加工して利用している。石材は15が緑色岩、16が硬砂岩である。

（4）横刃形石器（第18図、PL 9）

33点出土した。扁平な剥片の縁辺を利用した石器で、大半が背面に自然面を残す。石材は堅砂岩・硬砂岩が3分の2を占め、次いで緑色岩が8点である。出土量の多い打製石斧と石材を比較した場合、石材選択が異なる。打製石斧では緑色岩、横刃形石器が砂岩系の利用が高い。17は縦長の剥片であるが、縁辺を刃部として利用する点で横刃形石器として扱った。21・24は一部に摩耗痕跡がある。掲載資料の石材は21・25の緑色石以外、硬砂岩である。

（5）石錘（第19図、PL 9）

6点出土した。楕円礫の両端に敲打による抉入部がある。石材は28が片麻岩以外、硬砂岩である。

（6）敲石・磨石・凹石（第19図、PL 9）

敲石8点、磨石2点、凹石1点が出土した。素材となる円形・楕円形・棒状の礫に敲打痕・磨面・凹痕がある。33・34は礫全体に各痕跡が認められた。石材は31が花崗岩、32が砂岩以外、緑色岩である。

（7）石皿、台石（第19図、PL 9）

石皿4点、台石2点が出土した。大型扁平礫の表面に使用痕跡となる摩耗痕、敲打痕が観察できたものである。36は使用による窪みが見られた。石材は35～38の全てが花崗岩である。

第８表　石器器種組成表

	石鏃	石錐	石匙	石皿	削器	原石	石核	石鋸	石鏃未成品	台石	打製石斧	敲石	二次加工剥片	微細剥離剥片	凹石	磨製石斧	磨石	両極石器	横刃形石器	計
ＳＢ０１	1	－	－	－	－	－	1	1	－	－	6	－	4	－	－	1	－	1	8	23
ＳＢ０２	2	－	－	－	1	－	1	1	2	2	6	5	－	－	1	－	1	2	9	33
ＳＫ	3	1	－	2	1	3	2	1	1	－	19	2	1	10	－	1	－	2	12	61
遺構外１区	－	－	1	－	1	－	－	－	－	－	6	－	－	3	－	3	－	1	2	17
遺構外２区	－	－	1	2	1	－	3	1	1	－	11	1	－	3	－	1	1	2	2	28
合計	6	1	2	4	4	3	7	4	4	2	48	8	5	16	1	6	2	8	33	164

第９表　土器観察表

図版	遺物番号	PL	写真番号	管理番号	出土位置	時期（縄文）	色調 外面	色調 内面	胎土 長石	胎土 雲母	文様・特徴	備考
11	1	4	1	1	SB01 床	中期初頭～中葉	2.5Y7/3	2.5Y6/3	中	微	横位半隆起縄文（連続刺突）→横位平行沈線→環状隆帯（４単位）＋連続刺突のある逆Ｕ字状隆帯・蛇行隆帯（各２単位）貼付→隆帯モチーフ間を縦位平行沈線で区画（８区画）	３期
11	2	4	2	2	SB01 下層、No.1	中期初頭～中葉	7.5YR6/6	5YR5/6	中	微	三角状突起 口縁部：地文（RL）の上に横位平行沈線（１条） 胴部：地文（RL）の上に横位平行沈線（１条）＋突起の下に縦位平行沈線（２条）	２・３期
11	3	4	3	3	SB01 下層	中期初頭～中葉	2.5Y6/3	2.5Y5/2	多	微	波状口縁（４単位）地文（RL）→円形突起→縦位平行沈線文→横位平行沈線文→横位平行沈線文→Ｕ字状沈線区画＋三叉部に刺突→横位平行沈線→縦位平行沈線	２・３期 集合沈線文系
11	4	4	4	16	SB01	中期初頭～中葉	10YR6/3	10YR7/3	多	微	横位平行沈線→横位隆帯（結節沈線）→斜走沈線→横位隆帯（結節沈線）→横位平行沈線→縦位平行沈線	２・３期
11	5	4	5	17	SB01	中期初頭～中葉	10YR6/3	10YR5/2	多	微	縦位隆帯（結節沈線）＋綾杉文（斜走平行沈線）	２・３期
11	6	4	6	18	SB01	中期中葉	7.5YR5/3	7.5YR4/3	中	－	刺突→横位隆帯（半裁竹管内なで）＋縦位隆帯（半裁竹管連続刺突）→横位半隆起縄文→縦位半隆起縄文	３期（鉢沢式）
11	7	4	7	19	SB01	中期初頭	5YR3/1	5YR4/1	中	微	横位半隆起縄文（連続爪形文）２条	２期
11	8	4	8	20	SB01	中期初頭	10YR8/6	10YR7/6	多	微	横位連続爪形文→横位三角刺突文	２期 北裏Ｃ式？
11	9	4	9	21	SB01	中期初頭～中葉	2.5YR2/2	5YR5/4	中	微	沈線（縦＋横＋斜め）、地文（RL）	２・３期
11	10	4	10	22	SB01 下層	中期初頭～中葉	2.5YR2/2	5YR6/4	多	中	縦位平行沈線→横位沈線→隆帯（剥落）→地文（RL）	２・３期
11	11	4	11	4	SB02 No.4～8・15・18、壁	中期後葉	2.5Y4/2	2.5Y5/2	多	中	円形沈線区画文（残存：７単位）＋唐草文（沈線） 綾杉状沈線→逆Ｕ字沈線区画	12・13 期
11	12	4	12	5	SB02 床	中期後葉	2.5Y6/4	10YR6/8	多	中	円形沈線区画文（９単位）＋縦位沈線 綾杉状沈線→縦位沈線（３条）	12・13 期
12	13	4	13	6	SB02 No.21	中期後葉	7.5YR6/3	10YR6/3	多	中	折返し口縁　地文（RL）→波状隆帯→隆帯上下に沈線→単沈線による渦巻文	12・13 期
12	14	5	14	7	SB02	中期後葉	2.5Y7/3	2.5Y7/3	多	微	円形沈線区画（10 単位）＋地文（RL） 地文（RL）→縦位沈線（３条）	12・13 期
12	15	5	15	8	SB02	中期後葉	2.5Y6/4	2.5Y6/4	中	中	口縁部（無文）直下に横位隆帯→刺突（２列）→地文（RL）→縦位隆帯区画（６区画）胴部中位に横位隆帯→縦位蛇行沈線→綾杉状沈線	12・13 期
12	16	5	16	23	SB02 No.9	中期後葉	7.5YR5/2	10YR5/2	中	微	円形区画文（円形刺突充填）→沈線区画（綾杉文）	12・13 期
12	17	5	17	24	SB02 No.11・14・17	中期後葉	5YR3/1	7.5YR5/4	中	微	円形区画文（縦位沈線）	12・13 期
12	18	5	18	26	SB02 No.16	中期後葉	10YR6/2	10YR6/3	少	－	沈線区画（綾杉文）	12・13 期
12	19	5	19	27	SB02	中期初頭～中葉	5YR3/1	10YR6/2	少	－	波状口縁　地紋（RL 横位）→環状突起（貼付）→横位平行沈線＋縦位平行沈線	２・３期 平出 3A 式
12	20	5	20	28	SB02	中期後葉	7.5YR5/4	5YR5/4	微	－	隆帯横位楕円区画文（内部縦位沈線）→綾杉文＋縦位沈線	12・13 期
12	21	5	21	29	SB02	中期後葉	5YR5/4	7.5YR4/4	微	微	隆帯横位渦巻楕円文（内部斜走沈線）	12・13 期
12	22	5	22	30	SB02	中期後葉	10YR6/3	10YR5/2	微	微	地文（綾杉文）＋縦位沈線（３条）	12・13 期

図版	遺物番号	PL	写真番号	管理番号	出土位置	時期（縄文）	色調 外面	色調 内面	胎土 長石	胎土 雲母	文様・特徴	備考
12	23	5	23	31	SB02	中期後葉	2.5YR5/6	2.5YR5/6	微	－	口唇部：沈線 口縁部：隆帯横位円形区画文（円形刺突） 胴部：地文（RL 縦位施文）＋縦位２条沈線（間すり消し）	12・13 期
12	24	5	24	32	SB02	中期後葉	10YR5/3	7.5YR4/1	少	少	横位円形区画文（縦位沈線）	12・13 期
12	25	5	25	33	SB02	中期	10YR8/3	10YR6/3	微	少	地文（縦位縄文）	他系統（東海系？）
12	26	5	26	34	SB02	中期中葉	5YR3/2	7.5YR6/4	中	微	半隆起線三角区画（連続刺突文）	3・4 期 勝沢・新道式並行
12	27	5	27	35	SB02	中期後葉	7.5YR4/4	5YR5/4	少	微	隆帯横位楕円区画文（内部斜走沈線）	12・13 期
13	28	5	28	36	SK01	中期初頭	10YR6/3	10YR7/2	少	－	三角状突起 刺突文→半隆起線→連続爪形文（２条）半隆起線	1・2 期
13	29	5	29	37	SK01	中期初頭	7.5YR6/3	7.5YR6/3	少	微	連続爪形文→結節沈線→斜走沈線	1・2 期
13	30	5	30	38	SK01	中期初頭	10YR6/3	10YR3/1	少	微	三角状突起 半隆起線→縦位平行沈線＋縦位圧痕隆帯	1・2 期
13	31	5	31	40	SK01	中期初頭	5YR4/4	5YR5/4	少	－	口唇部：刺突　横位沈線→三角印刻	1・2 期
13	32	5	32	41	SK01	中期初頭	7.5YR7/4	7.5YR7/4	微	－	地文（LR）→円形刺突文	1・2 期
13	33	6	33	45	SK10	中期初頭	10YR6/2	10YR6/2	少	－	平行沈線→円形沈線（斜走沈線）	1・2 期
13	34	6	34	46	SK14	中期初頭～中葉	5YR5/4	7.5YR5/4	中	少	波状口縁　地文＋隆帯５条（地文）→横位沈線（コンパス文）→無文帯→横位沈線	2・3 期
13	35	6	35	9	SK15	中期初頭～中葉	10YR6/4	10YR6/4	中	微	円形突起（４単位）から縦位隆帯（連続刺突）垂下→口縁上端に水平連続刺突（2 列）→横位隆帯（連続刺突）→縦位平行沈線→横位平行沈線	2・3 期 平出 3A 式
13	36	6	36	47	SK15 No.2	中期初頭	10YR7/3	10YR7/3	中	微	横位半隆起線（連続爪形文）→横位半隆起線	北裏Ｃ式
13	37	6	37	10	SK22	中期後葉	10YR4/1	7.5YR6/4	中	微	波状口縁（４単位）斜行短沈線＋横位半隆起線（２条）波長部下に横位半隆起線充填の縦位方形区画	12・13 期
13	38	6	38	11	SK25	中期初頭	2.5Y6/4	2.5Y6/4	微	－	横位半隆起線（爪形文）→横位平行沈線→Ｌ字・逆Ｌ字状沈線区画→横位押引き沈線（１条）→斜行平行沈線→横位押引き沈線（２条）→縦位平行沈線→横位沈線→Ｕ字状＋横位平行沈線による三叉文部に刺突	2 期 集合沈線文系
13	39	6	39	49	SK26	中期初頭	10YR6/2	7.5YR6/4	微	－	横位半隆起線（結節沈線）→横位半隆起線（結節沈線）→横位半隆起線	1・2 期
13	40	6	40	50	SK40	中期初頭	7.5YR5/4	5YR6/3	微	微	横位半隆起線（連続爪形文）→無文	北裏Ｃ式
13	41	6	41	51a	SK40	中期初頭	7.5YR5/3	10YR6/3	中	中	横位半隆起線２条（連続爪形文）→縦位半隆起線２条（連続爪形文）	北裏Ｃ式
13	42	6	42	51b	SK40	中期初頭	7.5YR6/4	10YR6/3	少	微	横位半隆起線２条（連続爪形文）	北裏Ｃ式
13	43	6	43	51c	SK40	中期初頭	7.5YR5/3	10YR6/3	中	少	横位半隆起線３条（連続爪形文）→無文	北裏Ｃ式
13	44	6	44	51d	SK40	中期初頭	7.5YR6/4	10YR6/4	微	微	横位半隆起線１条（連続爪形文）→斜位半隆起線２条（連続爪形文）	北裏Ｃ式
14	45	6	45	12	SK61	中期初頭～中葉	2.5YR4/4	5YR5/6	微	－	上部：横位半隆起線文→短い縦位平行沈線と横位平行沈線 胴部：無文	2・3 期 集合沈線文系
14	46	6	46	13	SK61 No.3	中期初頭～中葉	2.5YR4/6	5YR6/4	微	－	横位の平行沈線→Ｕ字状の平行沈線で区画 胴部：RL の地文	2・3 期 集合沈線文系
14	47	6	47	52	SK61 No.2	中期初頭～中葉	5YR2/2	5YR5/8	微	－	三角状突起　地文（RL）→突起貼付け→横位平行沈線（２条）→斜位平行沈線→横位平行沈線	No48 と同一個体 平出 3A 式
14	48	6	48	53	SK61 No.3	中期初頭～中葉	5YR5/6	2.5YR5/6	微	－	三角状突起　地文（RL）→突起貼付け→横位平行沈線（２条）→斜位平行沈線→横位平行沈線	No47 と同一個体 平出 3A 式
14	49	6	49	59	SK61	中期初頭～中葉	2.5YR3/1	5YR5/8	多	中	三角状突起 地文（RL）→平行沈線→突起貼付→斜位平行沈線	平出 3A 式
14	50	6	50	57	SK61 No.13	中期初頭～中葉	2.5YR3/1	7.5YR4/2	多	中	地文（RL）→横位半隆起線（２条）→斜走平行沈線→横位半隆起線	平出 3A 式
14	51	6	51	58	SK61	中期初頭～中葉	5YR2/2	5YR6/6	中	中	口縁部に突起のある集合沈線文系土器 横位沈線→縦位沈線→横位沈線	2・3 期 集合沈線文系
14	52	7	52	55	SK61 No.7	中期初頭～中葉	5YR2/3	5YR5/6	多	少	横位半隆起線（５条）→縦位短沈線	2・3 期 集合沈線文系、No53 と同一個体
14	53	7	53	56	SK61 No.8	中期初頭～中葉	2.5YR3/4	2.5YR5/8	多	少	横位半隆起線→縦位短沈線＋縦位平行沈線	2・3 期 集合沈線文系、No52 と同一個体
14	54	7	54	54	SK61	中期初頭～中葉	5YR5/6	5YR1.7/1	多	少	地文（RL）	

図版	遺物番号	PL	写真番号	管理番号	出土位置	時期（縄文）	色調 外面	色調 内面	胎土 長石	胎土 雲母	文様・特徴	備考
14	55	7	55	60	SK65	中期	5YR4/2	5YR4/2	多	少	地文（LR）+沈線	
14	56	7	56	61	SK70	中期初頭	5YR7/4	7.5YR7/4	少	少	沈線→横位降帯（連続爪形文）→無文→横位降帯（連続爪形文）	北裏Ｃ式
14	57	7	57	62	SK75	中期初頭～中葉	5YR4/3	10YR5/3	中	少	降帯による円形区画（沈線による同心円）	2・3 期
14	58	7	58	63	SK75	中期初頭～中葉	7.5YR5/4	5YR4/1	少	少	地文（LR）+縦位沈線	2・3 期
14	59	7	59	64	SK75	中期初頭～中葉	5YR5/6	5YR3/1	中	少	弧状沈線→斜走平行沈線+半降起線（連続爪形文）	2・3 期
15	60	7	60	14	SK90	中期初頭～中葉	10YR5/4	10YR5/4	少	微	波状口縁(4 単位)　波頂部：突起貼り付け 縦位沈線→横位沈線(口唇部・頸部)→縦位平行沈線+Ｕ字状沈線	2・3 期 平出 3A 式
15	61	7	61	66	SK90	中期初頭～中葉	10YR6/3	10YR4/3	少	微	波状口縁　縦位平行沈線→横位平行沈線→逆Ｕ字状降帯→逆Ｕ字状沈線（大小３段）→地文（RL）→横位平行沈線→Ｕ字状沈線区画	2・3 期 平出 3A 式
15	62	7	62	15	SK91	中期後葉	2.5Y6/4	2.5Y6/4	中	少	円形沈線区画+刺突→縦位沈線→地文(RL)	12・13 期
15	63	7	63	67	SK93	中期初頭	10YR8/1	10YR8/3	少	－	半降起線→地文（LR）+縦位平行沈線	東海系
15	64	7	64	68	SK93	中期初頭	7.5YR6/6	5YR5/6	少	－	結節沈線→横位沈線	1・2 期
15	65	7	65	69	SK96	中期初頭	5YR6/6	5YR6/4	少	微	環状突起（縦位沈線）　横位半降起線→縦位沈線→横位半降起線→縦位沈線	1 期 五領ヶ台式
15	66	7	66	70	SK98	中期中葉末	10YR6/3	10YR6/2	中	少	細降線貼付（縦位＋Ｖ字方向）	9 期 細降線文土器
15	67	7	67	71	SK98	中期初頭	5YR6/4	5YR6/6	中	少	三角状突起+縦位結節降帯　横位交互刺突（上下）→弧状の平行沈線（菱形区画）	2 期
15	68	8	68	72	SK106	中期後葉	7.5YR4/3	7.5YR5/4	中	少	縦位半降起線による縦位の区画+区画内結節回転	12・13 期 親田式
15	69	8	69	73	SK109	中期	7.5YR6/3	7.5YR6/4	多	微	無文	
15	70	8	70	74	SK116	中期初頭	5YR4/3	5YR4/6	少	微	横位半降起線→縦位半降起線	2 期
15	71	8	71	75	SK117	中期初頭	7.5YR6/4	7.5YR4/3	少	微	結節沈線→横位沈線（工具による押し引き）	1 期
15	72	8	72	76	SK121	中期初頭	5YR6/6	2.5YR5/6	不明鉱物含む	微	地文（L）+斜位刺、四角形の底部	近畿・関西系 船元式
15	73	8	73	77	SK121	中期初頭	7.5YR4/4	10YR6/4	少	微	横位半降起線→斜位半降起線+鋸歯状半降起線→横位半降起線→斜位半降起線	1 期
15	74	8	74	78	SK121	中期初頭	7.5YR5/4	10YR6/6	多	微	平行沈線による斜格子→縦位平行沈線	1 期
15	75	8	75	79	SK121	中期初頭	5YR4/6	5YR3/3	多	微	縦位沈線→横位半降起線→縦位沈線→横位沈線	1 期
16	76	8	76	42a	1 区検出	中期初頭～中葉	10YR7/3	10YR7/3	中	微	縦位平行沈線→横位平行沈線（2 条）→縦位平行沈線	2・3 期 平出 3A 式
16	77	8	77	42b	1 区検出	中期初頭～中葉	10YR6/3	10YR7/4	中	中	縦位平行沈線→横位平行沈線（3 条）→縦位平行沈線	2・3 期 平出 3A 式
16	78	8	78	43a	1 区検出	中期初頭～中葉	10YR4/1	10YR7/3	中	中	縦位平行沈線→横位蛇行沈線（2 条）→横位半降起線コンパス文	2・3 期 平出 3A 式
16	79	8	79	43b	1 区検出	中期初頭～中葉	10YR4/1	10YR6/4	中	微	縦位平行沈線→横位平行沈線（2 条）→縦位平行沈線	2・3 期 平出 3A 式
16	80	8	80	80	2 区検出	中期中葉	7.5YR7/6	7.5YR5/3	多	－	降帯による楕円区画（降帯脇に連続Ｄ字状押文）	3・4 期
16	81	8	81	81	2 区カク	中期後葉	7.5YR6/4	2.5YR5/6	中	少	沈線による楕円区画（区画内横位短沈線）	12・13 期
16	82	8	82	83	2 区カク	中期後葉	10YR7/3	10YR5/3	少	微	沈線による円形区画	12・13 期
16	83	8	83	84	2 区カク	中期後葉	10YR7/3	7.5YR5/4	多	微	結節縄文	12・13 期 親田式
16	84	8	84	85	2 区表	中期後葉	5YR5/4	5YR4/3	多	少	縦位沈線による区画（区画内鋭杉文）	12・13 期
16	85	8	85	86	2 区検出	中期前半	7.5YR5/3	10YR6/2	多	少	折返し口縁　地文（RL）	2・3 期？ №86・87 と同一個体
16	86	8	86	87	2 区Ｚ	中期前半	7.5YR6/4	10YR7/3	多	少	地文（RL）	2・3 期？ №85・87 と同一個体
16	87	8	87	88	2 区Ｚ	中期前半	7.5YR6/4	7.5YR7/4	多	少	地文（RL）	2・3 期？ №85・86 と同一個体
16	88	8	88	89	1 区Ｚ	中期初頭～中葉	5YR3/3	7YR5/4	中	少	横位半降起線→半降起線円形区画を施文後、地文（RL）	2・3 期
16	89	8	89	90	1 区Ｚ	中期	5YR4/3	2.5YR3/2	多	中	地文（RL の結節縄文）	

※胎土　多量＝多、中量＝中、少量＝少、微量＝微

第５章　総括

羽場権現堂遺跡は日当たりのよい緩斜面にあり、その範囲は広く、調査区はその北端部にあたる。調査区は東西に細長く伸び、面積的にも限られた範囲であったが、縄文時代中期の集落跡を確認し、成果を上げることができた。

発見した２軒の竪穴建物跡は、いずれも調査区内で全容を調査していないが、出土した遺物から、時期を異にしてつくられていたことがわかった。とくに、中期初頭の竪穴建物跡の調査事例は市内で初見となった。一方、発見された土坑は出土遺物も少なく、帰属時期が明確でないものの、竪穴建物跡と同時期の所産と考えている。また、土坑の用途を確定するに至ってはいないが、形状から貯蔵的施設の可能性もある。

出土した縄文土器では、東海地方にみられる土器「北裏Ｃ式」、「船元式」との共伴事例などが提示できた。他地域との頻繁な交流があったことがうかがえる。石器は打製石斧、横刃形石器の出土数が多く、石材も選択されていることが指摘できた。土器・石器ともに、当地域の特徴と考えられる。

今回の調査は遺跡の一端を調査した結果であったが、当地における遺跡の様相を考えるうえで貴重な調査事例であったと考えている。今後、調査成果が活用されることを望みたい。

最後に、発掘調査に御協力いただいた関係者の皆さま、発掘作業から報告書作成までに貴重な御教示をいただいた多くの皆さまに、深甚なる謝意を申し上げます。

引用・参考文献

野村一寿 1988「縄文中期の土器」『長野県史 考古資料編　全一巻（四）遺構・遺物』

宮崎朝雄・綿田弘実 2013「長野県における縄文時代中期土器の編年と動態」『研究発表資料 文化の十字路信州』日本考古学協会 2013 年度長野大会実行委員会

守矢昌文 2013「諏訪地域における縄文時代中期の土器群構成とその分布」『研究発表資料 文化の十字路信州』日本考古学協会 2013 年度長野大会実行委員会

坂井勇雄 2013「下伊那地域における縄文時代中期土器の様相」『研究発表資料 文化の十字路信州』日本考古学協会 2013 年度長野大会実行委員会

綿田弘実 2013「長野県における縄文時代中期土器群の分布状況」『研究発表資料 文化の十字路信州』日本考古学協会 2013 年度長野大会実行委員会

鵜飼幸雄 1977「平出第Ⅲ類Ａ土器の編年的位置付けとその社会的背景」『信濃』29-４

林茂樹 1985「縄文中期土器『平出第Ⅲ類Ａ』の系譜再論」『信濃』37-11

吉川金利 2003「下伊那縄文中期後葉に於ける土器様相と編年」『長野県考古学会誌』102

飯田市教育委員会 2003『城除遺跡』

長野県埋蔵文化財センター 2010『国道 474 号（飯喬道路）埋蔵文化財発掘調査報告書４ 飯田市内その４ 川路大明神原遺跡』

下伊那誌編纂会 1991『下伊那史　第一巻』

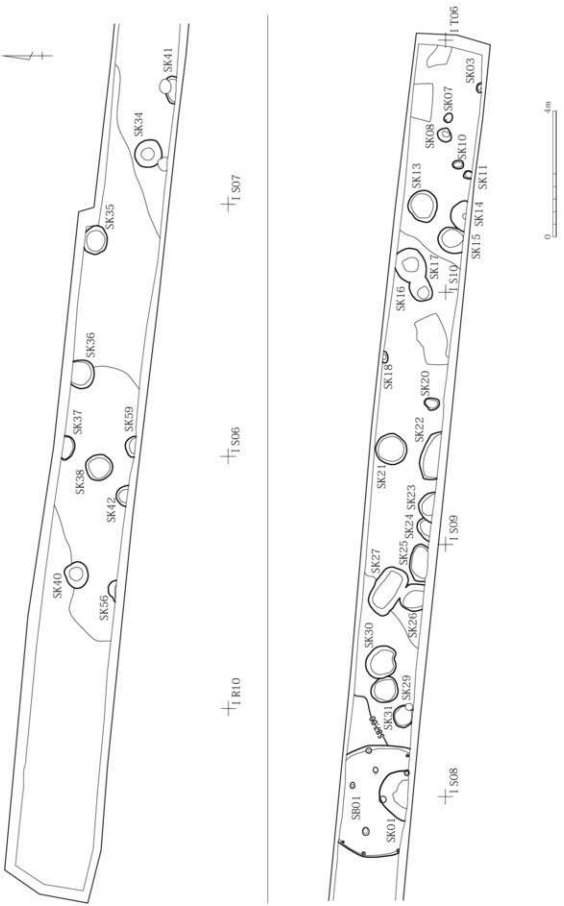
長野県飯田市教育委員会 1998『飯田の遺跡　市内遺跡詳細分布調査報告書』

長野県飯田市教育委員会 2003『羽場堺遺跡　方角東遺跡』

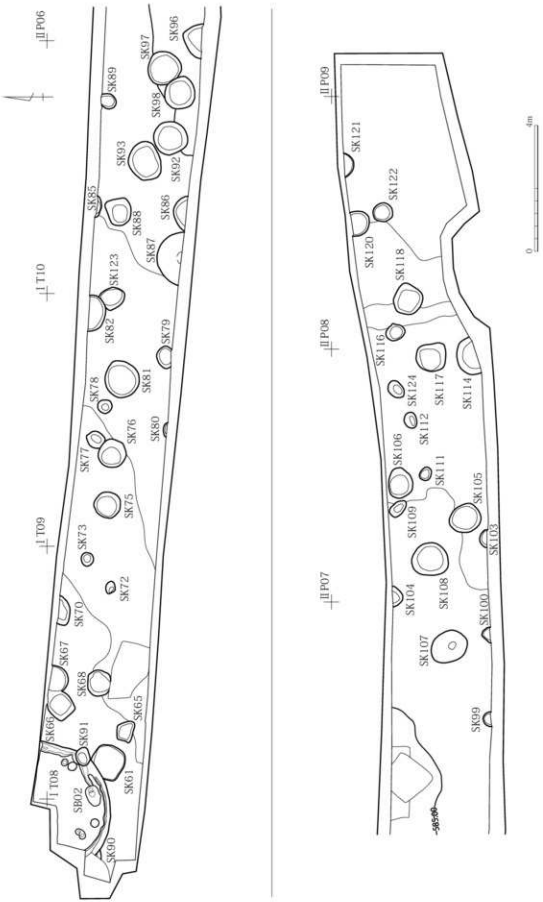
長野県飯田市教育委員会 2004『権現堂前遺跡』

長野県飯田市教育委員会 2008『羽場堺遺跡　方角東遺跡』

長野県飯田市教育委員会 2008『砂払遺跡』

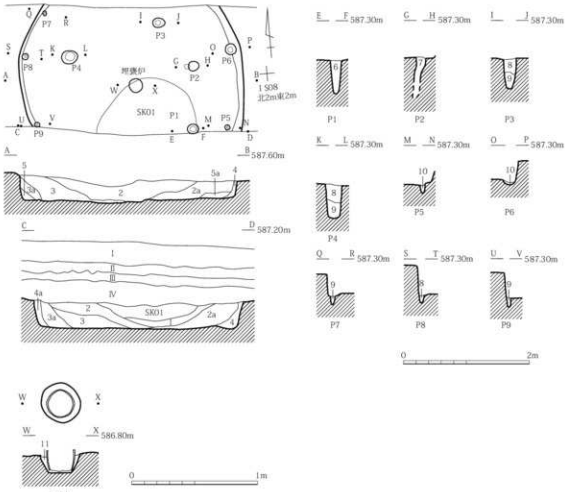

SK41
SK34
SK35
SK36
SK37
SK59
SK38
SK42
SK40
SK56
I R10
I S07
I S06
I T06
SK03
SK07
SK08
SK10
SK13
SK11
SK14
SK15
SK12
I S10
SK16
SK18
SK20
SK22
SK21
SK23
SK24
SK25
SK27
SK26
I S09
SK30
SK29
SK31
SK28
I S08
SB01
SK01
0
4m

第５図　１区遺構配置図


P06
T10
T09
T08
P09
P08
P07
SK96
SK97
SK98
SK89
SK92
SK93
SK86
SK88
SK85
SK87
SK123
SK82
SK79
SK81
SK78
SK76
SK80
SK77
SK75
SK73
SK72
SK70
SK67
SK68
SK65
SK69
SK91
SK61
SK92
SK90
SK121
SK122
SK120
SK118
SK116
SK124
SK117
SK114
SK112
SK106
SK111
SK105
SK109
SK103
SK104
SK108
SK100
SK107
SK99
0
4m

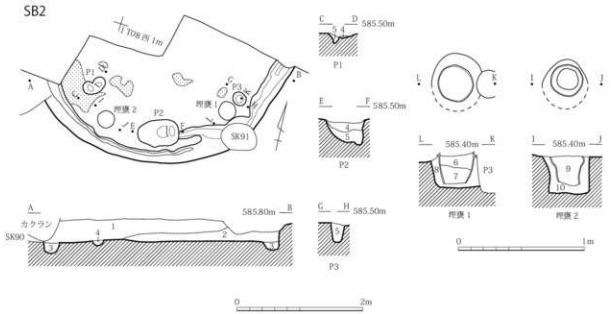
第６図　２区遺構配置図

SB1



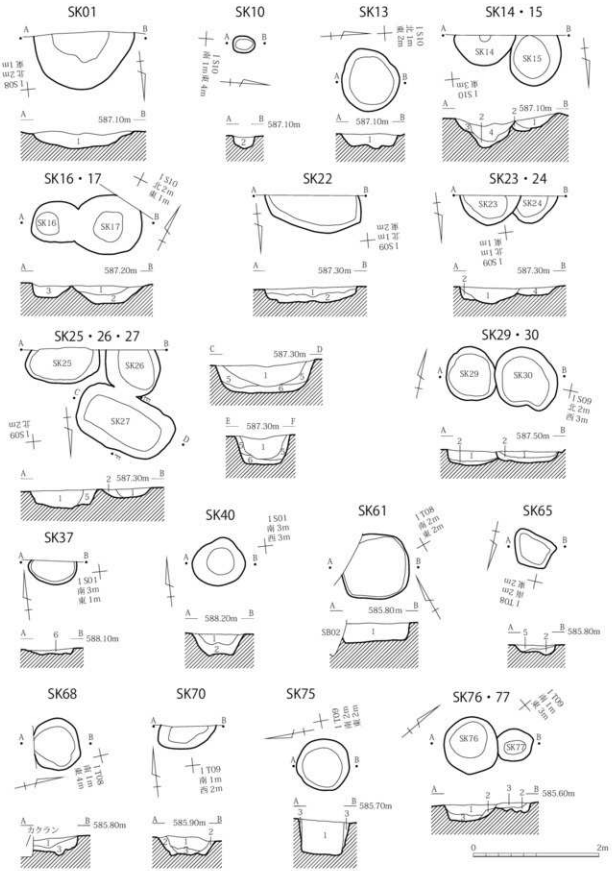
1　黒褐色 (10YR2/2)　シルト。粘性なし。しまりややあり。小礫 (径 1 ～ 7mm) を多量、白色粒子 (径 1 ～ 2mm) を少量混入
2　黒褐色 (10YR2/3)　シルト。粘性なし。しまりややあり。小礫 (径 1 ～ 7mm) を多量混入 (1 層より少ない)
2a　黒褐色 (10YR2/3)　シルト。粘性なし。しまりややあり。混入礫が 2 層より大きい (径 1 ～ 10mm)
3　暗褐色 (10YR3/3)　シルト。粘性なし。しまりあり。小礫 (径 1 ～ 7mm)、白色粒子 (径 1 ～ 2mm) を混入
3a　暗褐色 (10YR3/3)　シルト。粘性なし。しまりあり。3 層より混入物の割合が多い
4　暗褐色 (10YR3/4)　シルト。粘性なし。しまりややあり。小礫 (径 1 ～ 7mm)、白色粒子 (径 1 ～ 2mm) を 1 ～ 3 層より少なく混入。黄褐色土粒子を混入
4a　暗褐色 (10YR3/4)　シルト。粘性なし。しまりやや強い。4 層と比べ、黄褐色土を部分的にブロック状に混入
5　黒褐色 (10YR2/2)　シルト。粘性なし。しまりややあり。小礫 (径 1 ～ 7mm)、白色粒子 (径 1 ～ 2mm)、黄褐色土粒子を少量混入
5a　黒褐色 (10YR2/2)　シルト。粘性なし。しまりややあり。小礫 (径 1 ～ 7mm)、白色粒子 (径 1 ～ 2mm) が 5 層より多い
6　黒褐色 (10YR2/3)　シルト。粘性なし。しまりあり。小礫 (径 1 ～ 10mm) を混入。黄褐色土粒子 (径 1 ～ 3mm) を若干混入
7　黒褐色 (10YR2/3)　シルト。粘性なし。しまりなし。黄褐色土粒子を混入
8　黒褐色 (10YR2/3)　シルト。粘性なし。しまりあり。小礫 (径 1 ～ 3mm)、白色粒子 (径 1 ～ 3mm) を少量混入
9　黒褐色 (10YR2/3)　シルト。粘性なし。しまりあり。小礫 (径 1 ～ 7mm)、白色粒子 (径 1 ～ 2mm)、黄褐色土ブロック混入
10　暗褐色 (10YR3/4)　シルト。粘性なし。しまりややあり。小礫 (径 1 ～ 3mm) を少量、黄褐色粒子 (径 0.5 ～ 1mm) を多く混入
11　にぶい黄褐色 (10YR10/4)　シルト。粘性ややあり。しまりややあり。白色粒子 (径 1 ～ 2mm) を少量、黄褐色粒子 (径 1 ～ 2mm) を多く混入

第 7 図　SB01 遺構図

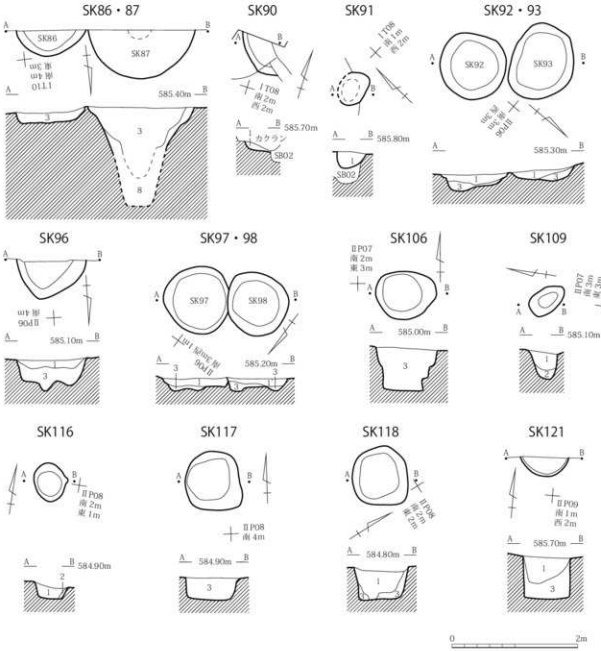


1　黒褐色 (10YR2/2)　シルト。粘性なし。しまりあり。SK90の埋土より硬く、小礫（径２～ 10mm) を多く、白色粒子 (径１～２mm) を少量混入
2　黒褐色 (10YR2/3)　シルト。粘性なし。しまりあり (1 層より弱い)。小礫（径２～ 10mm) を混入。白色粒子 (径１～２mm) を少量混入
3　黒褐色 (10YR3/3)　シルト。地山の黄褐色土粒子 (径１～３mm) を多く混入
4　黒褐色 (10YR2/3)　シルト。粘性なし。しまりあり。小礫の混入は少ない、白色粒子 (径１～２mm) を少量混入
5　黒褐色 (10YR2/2)　シルト。小礫（径２～ 10mm) を多く、白色粒子 (径１～２mm) を少量混入。黄褐色土ブロック状に混入
6　黒褐色 (10YR2/3)　シルト。粘性なし。しまり弱い。白色粒子 (径１～２mm) を少量混入
7　黒褐色 (10YR2/3)　シルト。粘性なし。しまり弱い。小礫 (径１～３mm)、白色粒子 (径１～２mm)、黄褐色土を少量混入
8　明黄褐色 (10YR6/8)　シルト。粘性なし。しまりややあり
9　暗褐色 (10YR3/3)　シルト。小礫 (径２～５mm)、白色粒子 (径１～２mm) を少量混入
10　明黄褐色 (10YR6/8)　シルト。粘性なし。しまりややあり

第８図　SB02 遺構図

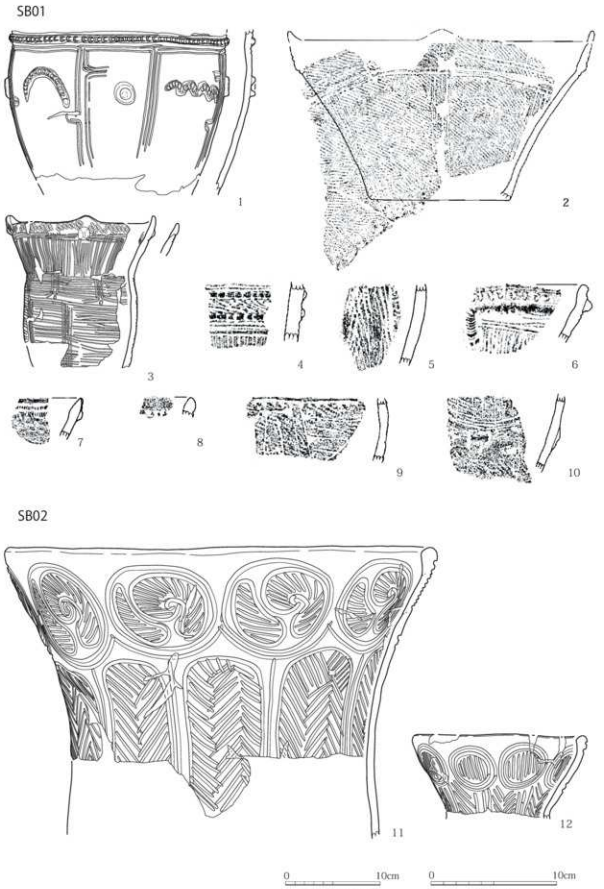

SK01
SK10
SK13
SK14・15
SK16・17
SK22
SK23・24
SK25・26・27
SK29・30
SK37
SK40
SK61
SK65
SK68
SK70
SK75
SK76・77
587.10m
587.20m
587.30m
587.50m
588.10m
588.20m
585.80m
585.60m
585.70m
585.90m
カクラン
0
2m

第９図　SK遺構図（１）

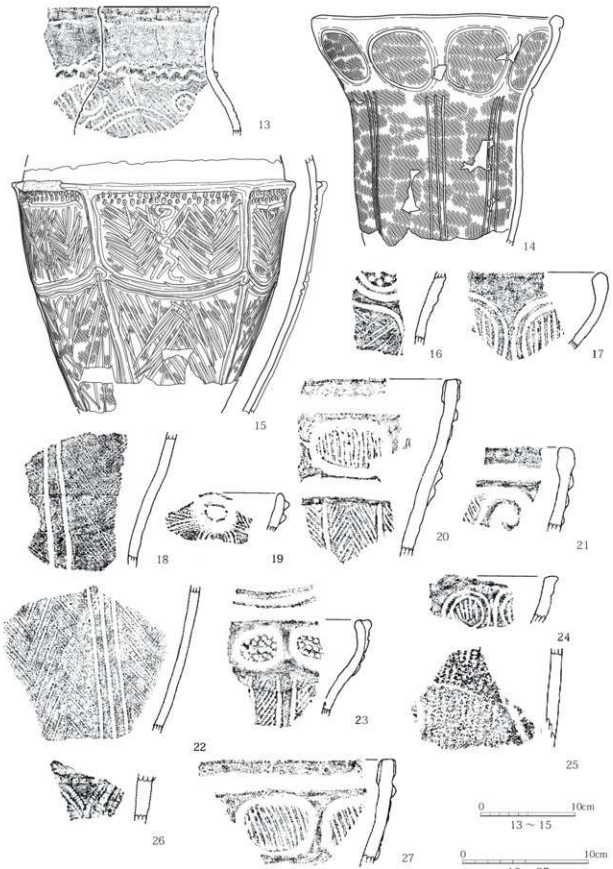


1	黒褐色 (10YR3/2)	シルト。粘性なし。しまりややなし。小礫まじり
1'	黒褐色 (10YR3/2)	シルト。粘性なし。しまりふつう。小礫まじり
2	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	シルト。粘性なし。しまりややなし。小礫まじり
3	黒褐色 (10YR3/1)	シルト。粘性なし。しまりややなし。小礫まじり。にぶい黄褐色土ブロック混入
4	黒褐色 (10YR3/2)	シルト。粘性なし。しまりふつう。小礫まじり。にぶい黄褐色土粒子を混入
5	暗褐色 (10YR3/3)	シルト。粘性なし。しまりなし。小礫まじり
6	暗褐色 (10YR3/3)	シルト。粘性なし。しまりふつう。小礫まじり。にぶい黄褐色土ブロック混入
7	黒褐色 (10YR2/3)	シルト。粘性なし。しまりあり。小礫まじり
8	黒褐色～暗褐色 (10YR3/2～4/3)	シルト。粘性なし。しまりふつう。小礫まじり。にぶい黄褐色土粒子・ブロック混入

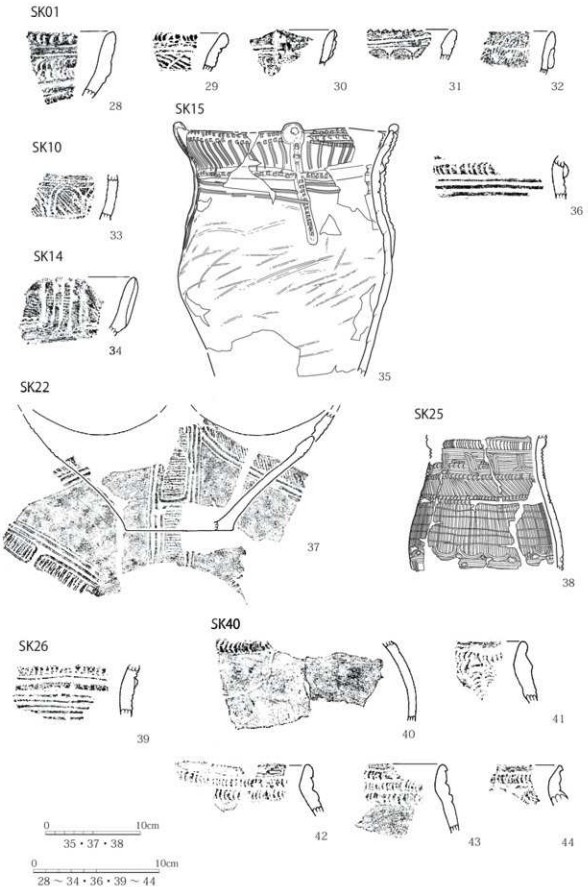
第10図　SK遺構図（2）



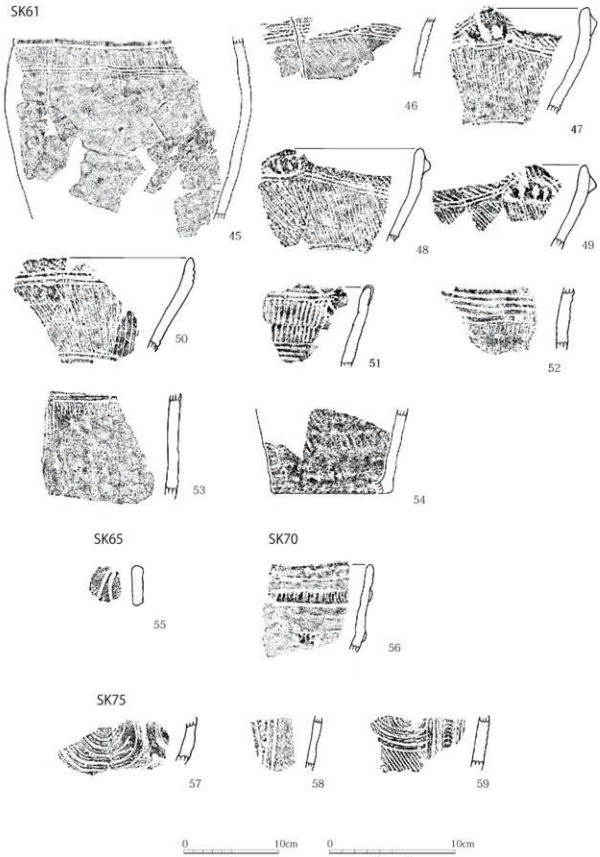
第11図　出土土器（1）



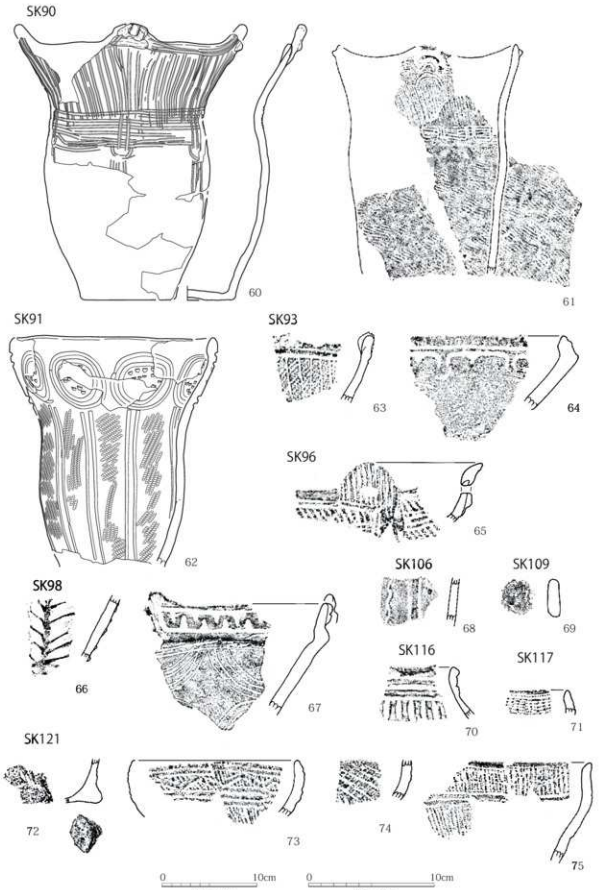
第12図　出土土器（2）


SK01
28
29
30
31
32
SK15
SK10
33
36
SK14
34
35
SK22
37
SK25
38
SK40
SK26
39
40
41
42
43
44
0
10cm
35・37・38
0
10cm
28～34・36・39～44

第13図　出土土器（3）

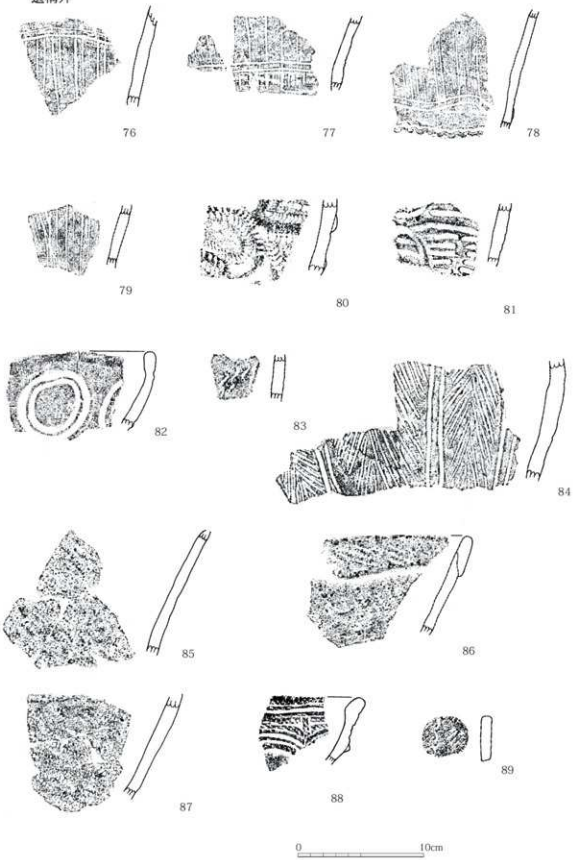

SK61
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
SK65
55
SK70
56
SK75
57
58
59
0
10cm
45
0
10cm
46 ～ 59

第14図　出土土器（4）

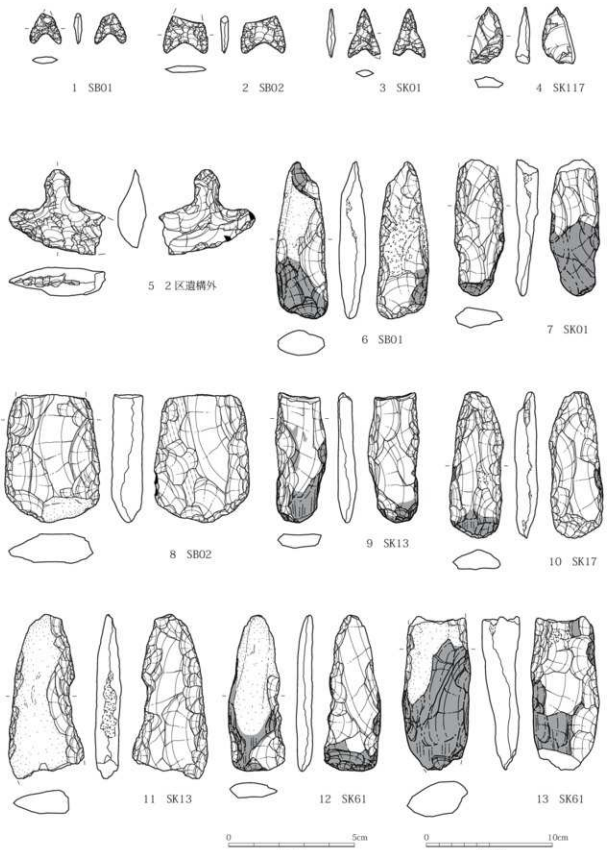

SK90
60
61
SK91
62
SK93
63
64
SK96
65
SK98
66
67
SK106
68
SK109
69
SK116
70
SK117
71
SK121
72
73
74
75
0
10cm
60～62
0
10cm
63～75

第15図　出土土器（5）

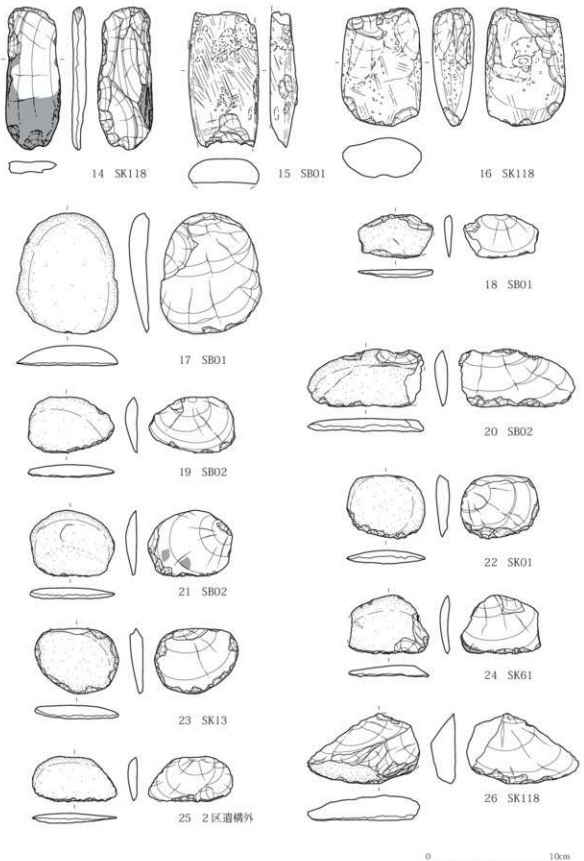
遺構外



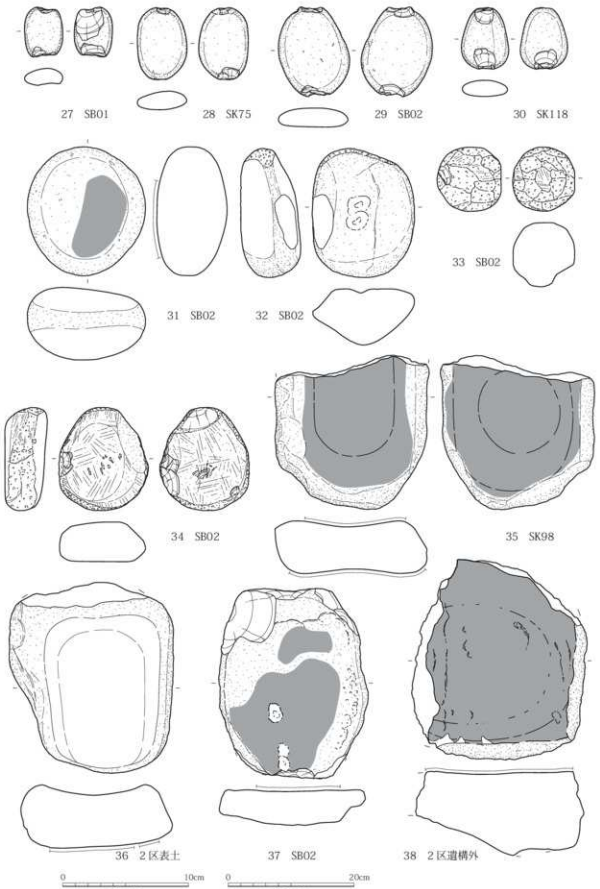
第16図　出土土器（6）


1 SB01
2 SB02
3 SK01
4 SK117
5 2区遺構外
6 SB01
7 SK01
8 SB02
9 SK13
10 SK17
11 SK13
12 SK61
13 SK61
0
5cm
1～5
0
10cm
6～13

第17図　出土石器（1）


14 SK118
15 SB01
16 SK118
17 SB01
18 SB01
19 SB02
20 SB02
21 SB02
22 SK01
23 SK13
24 SK61
25 2区遺構外
26 SK118
0
10cm

第18図　出土石器（2）


27 SB01
28 SK75
29 SB02
30 SK118
31 SB02
32 SB02
33 SB02
34 SB02
35 SK98
36 2区表土
37 SB02
38 2区遺構外
0 10cm
27～34
0 20cm
35～38

第19図　出土石器（3）

1 区調査区全景　東から

2 区調査区全景　東から

SB01 完掘

SB01 埋甕炉検出

SB01 磨製石斧出土

SB02 完掘

SB02 土器出土

SB02 土器出土

PL 2　竪穴建物跡　土坑

SB02 埋甕 1 断面

SB02 埋甕 2 断面

SK01 完掘

SK13 完掘

SK15 遺物出土

SK17 完掘

SK22 遺物出土

SK25 遺物出土

SK27 礫出土

SK61 遺物出土

SK75 断面

SK90 遺物出土

SK91 遺物出土

SK98 石皿出土

SK117 断面

SK118 完掘

PL 4　出土土器（1）

SB01

1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

SB02

11

12

13

SK01

PL 6　出土土器（3）

SK10
33
SK14
34
SK15
35
36
SK25
38
SK22
37
SK26
39
SK40
40
41
42
43
44
SK61
45
46
47
48
49
50
51

52
53
54

SK65
55

SK70
56

SK75
57
58
59

SK90
60
61

SK93
63
64

SK91
62

SK96
65

SK98
66
67

PL8　出土土器(5)

SK106

68

SK109

69

SK116

70

SK117

71

SK121

72

73

74

75

遺構外

76

77

78

79

80

81

82

83

84

85

86

87

88

89

1
2
3
4
5
27
28
29
30
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
31
32
17
18
20
33
34
24
19
21
25
22
26
23
35
37

報告書抄録

ふりがな	はばごんげんどういせき
書名	羽場権現堂遺跡
副書名	中央新幹線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　－飯田市その１－
シリーズ名	長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書
シリーズ番号	128
編著者名	藤原直人　鈴木時夫　岡村秀雄　平林　彰
編集機関	（一財）長野県文化振興事業団　長野県埋蔵文化財センター
所在地	〒388-8007　長野市篠ノ井布施高田963-4　TEL：026-293-5926　FAX：026-293-8157
発行年月日	2020年（令和２年）12月22日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
羽場権現堂遺跡（はばごんげんどういせき）	長野県飯田市大休（おおやすみ）1575-1	20205	137	35°52′26″（世界測地系）	137°79′84″（世界測地系）	20190412～20190731	500㎡	中央新幹線建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
羽場権現堂遺跡	集落跡	縄文時代	中期初頭：竪穴建物跡１軒 中期後葉：竪穴建物跡１軒 中期初頭～後葉：土坑81基	土器（中期）、石器（横刃型石器、打製石斧、石鏃ほか）	中期初頭・後葉の集落遺跡。市内において中期初頭の竪穴建物跡の調査事例は希少である。

要約	遺跡は松川左岸の河岸段丘上に位置する。本格調査履歴はない。 調査の結果、縄文時代中期初頭～中期後葉の集落跡が確認された。発見された遺構は竪穴住居跡２軒、土坑81基、遺構からは縄文土器、石器が出土した。今回、中期初頭～中葉の竪穴住居跡の出土例は飯田地域では稀であり、貴重な資料提示である。また、縄文時代中期初頭の土坑から出土した土器の中には他地域の特徴を持つ資料が見られ、当該期の地域間交流を考える上でも良好な資料である。

令和２（2020）年 12 月 22 日　発行

長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書　128

羽場権現堂遺跡

中央新幹線建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

－飯田市内　その１－

発行者　東海旅客鉄道株式会社
（一財）長野県文化振興事業団
長野県埋蔵文化財センター
〒 388-8007　長野県長野市篠ノ井布施高田 963-4
Tel　026-293-5926　Fax 026-293-8157
E-mail　info@naganomaibun.or.jp
印刷者　大日本法令印刷株式会社
〒 380-0935　長野県長野市中御所 3-6-25
Tel　026-228-1946　Fax　026-226-2649